

VIEW21

〈ビュー21〉

高校版

Volume 6

2017
February

2月

現場を知る

特集

学びと指導の 連続性を深める 中高連携

授業を進化! 思考を深化!
実践 アクティブ・ラーニング

世界史

にらやま
静岡県立韮山高校 美那川雄一

指導変革の軌跡

大阪府・私立

かおり おか
香ヶ丘リベルテ高校

広島県立

やす ふる いち
安古市高校

改良! 指導ツール ビフォーアフター

3年生0学期

出願書類作成用 調査用紙

人々との触れ合いを大切にしながらおいしさを伝える

① うどんの手打ち体験で子どもたちを指導。自分で打ったうどんを食べて、そのおいしさを実感してもらい、家族や友だちに吉田のうどんの魅力を伝えていってほしいと始めた活動。



② 地域の祭りや観光物産展などで出店。「うどんコロッケ」や「うどんバーガー」は、吉田のうどんを手軽に楽しんでもらいたいと、うどん部が開発した商品だ。



③ 道の駅に「うどん案内所」を開設。観光客の好みに合った店を紹介できるのも、市内すべての吉田のうどん店を取材したからこそできること。④ フリーペーパー「うどんナビ」(年1回発行)は、取材依頼、取材・撮影、誌面作成など、すべて生徒が行う。

誰からもそう言ってもらえる日を目指して
山梨の名物と言えば「吉田のうどん」

山梨県富士吉田市のソウルフード「吉田のうどん」を全国の人に もっと知ってほしい！ そうしたい思いで奮闘しているのが、山梨県立ひばりが丘高校のうどん部だ。吉田のうどん専門のホームページやフリーペーパーで全国に情報を発信したり、地元の製麺業者と協力してオリジナル麺を開発し、道の駅や物産展で販売したりと、うどんの魅力を保ちながら、2015年には富士吉田市から「吉田のうどん観光大使」に任命され、週末にはイベントや取材などに引っぱりだこ。ほとんど休みはないが、5人の部員たちは吉田のうどんの知名度アップのために日々精力的に活動している。

ハートを
こがせ!

Vol.12

山梨県立ひばりが丘高校
うどん部

地元のソウルフード
「吉田のうどん」の魅力を
全国に発信中!

うどんを通した
学校外の人との交流は
生徒の自信を高めていく



⑤ 知名度アップを目指そうと、全国のご当地うどんを広める学生たちとも交流。三重県伊勢市のうどん大使や東京大学のうどん部などが集まり、互いのうどんを作って試食。

⑦ 商業高校の研究発表大会やホームページのコンクールなどにも積極的に参加・応募し、うどん部の活動を紹介。上位入賞も果たしている。

⑥ うどん部の活動は、新聞やテレビで取り上げられることも多く、取材の数はこれまで50件以上にもなる。吉田のうどんの魅力を伝える表現力もレベルアップした。

2 特集

学びと指導の連続性を深める 中高連携

- 4 **現状把握** 中高連携の現状と真に求められるかたち
- 6 **実践事例1** 公立普通科3校と市内全中学校が
学力向上の課題や教育への思いを共有
「松江市内三校教科・進路指導協議会」(島根県立松江北・松江南・松江東高校)
- 10 **実践事例2** 中高連携で、学びに連続性を持たせ
中高の指導改善につなげる
熊本県立宇土中学校・高校
- 14 **これからの「中高連携」のあり方を語る**
中高と地域が連携し、生徒がこれからの時代を生きる力を豊かに育む
古河市立総和北中学校 校長 森田泰司 / 茨城県立古河第三高校 校長 福島克郎
古河市立総和北中学校 PTA会長 篠崎克佳 / 古河市PTA連絡協議会 前会長 鶴見尚司

18 「探究学習」開発・推進 追跡レポート

育てたい生徒像と個々の行事を往還的に吟味し、指導の全体像を描く

20 ハートをこがせ!

山梨県立ひばりが丘高校 うどん部 うどんを打って、売って、おいしさを伝えたい

22 授業を進化! 思考を深化! 実践 アクティブ・ラーニング

協働をベースとした論述指導を通して、自らの言葉で歴史を語り、世界史の本質に迫る
世界史◎静岡県立韮山高校 美那川雄一

26 指導変革の軌跡

大阪府・私立香ヶ丘リベルテ高校
進学指導◎生徒目線の指導を徹底し、表現教科新設4年目で公立大学合格者が誕生
広島県立安古市高校
進路指導改革◎組織的な進路指導で生徒の志望を高め、主体的な学びに導く

34 改良! 指導ツール ビフォーアフター

3年生0学期 出願書類作成用 調査用紙

38 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

地域社会を牽引するグローバルリーダーの育成を目指す地方私立大学の改革
共愛学園前橋国際大学◎グローバルプロジェクト

42 VIEW'S REPORT

英語力、思考力、精神力が鍛えられると出場者が実感
埼玉県の公立高校2校が英語ディベートの国際大会に出場!
関西大学が高校教員対象のアクティブ・ラーニングのセミナーを開催
アクティブ・ラーニングの効果的な手法を理論と実践の両面で学ぶ

52 Reader's VIEW

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 6

2017
February

2 月

今月の表紙メッセージ

現場を知る

◎「3現主義」(現場に行く・現物に触れる・現実を知る)という言葉があります。これは、ものづくりの世界で生まれた、問題解決に向かう時の姿勢を示した言葉で、生産分野だけではなく、あらゆる領域で活用できる考え方と言われています。そして、その姿勢・考え方は、問題や課題が見あたらない時こそ求められるものかもしれません。今号の特集テーマ「中高連携」の現状を見た時、改めてそう思いました。先生方はどのように感じられるでしょうか。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます *本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

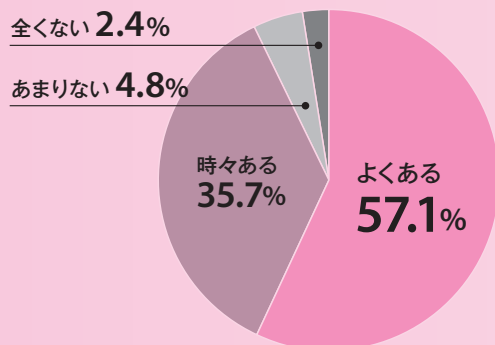
学びと指導の 連続性を深める 中高連携

2016年末に中央教育審議会から公表された次期学習指導要領に関する答申でも述べられているように、各学校段階で身につけさせておくべき力を相互につないでいくことが、今後ますます重要になる。しかしながら、高校現場では、「中高連携」の必要性を感じつつも、まだ十分な連携ができていないとは言えないのが現状のようだ。そこにはどのような課題があり、それはどうすれば解決できるのか。今号は、「中高連携」の現状と課題を整理し、

中学校と高校での学びと指導の連続性をより深めていくための「中高連携」のあり方を考えていく。

中高連携に対する高校教師の意識

Q. 普段のご指導の中で、「中高連携」の必要性を感じられることはありますか。



よくある・時々ある理由

- ◎小中、中高、高大の接続が、今後の教育改革の鍵であると感じるため。(東京都)
- ◎生徒は、中学校までにアクティブ・ラーニングの視点による主体的・対話的で深い学びを経験して高校に入学してくるが、高校では授業がなかなか変わっていない現状がある。(福島県)
- ◎企業の各部署が連携して常識を超えるようなことを生み出し、競争力を維持しているのと同じように、中高が連携し、学習・スポーツ・文化などの活動を展開する利点は多いと考える。(徳島県)

あまりない・全くない理由

- ◎何をどうすれば連携できるのか、全く分からない。(青森県)
- ◎義務教育である中学校の教員と高校の教員では、教育に対する価値観が全く異なり、そのベクトルの方向を一致させることは難しいと思う。(静岡県)
- ◎本校に入学予定の生徒に対してのみ、本校の教育と連続する内容で指導できれば、中学校、高校、そして生徒も得るところが大きいと思うが、様々な生徒が同じ教室で授業を受けなければならない今の中学校にそれを望むのは無理だと考えている。(茨城県)

本号のテーマ

「中高連携」の現状と課題を踏まえて、その進め方と価値、
これからの「中高連携」のあり方を考える

中高連携の現状と課題

現状把握【P.4~5】

- ◎変化の激しい社会を生きる上で必要な力を育成するため、幼小、小中、中高、高大の学びの連携がこれまで以上に重要になってきている。
- ◎学校段階を超えた連携・接続について、小学校、中学校、高校のいずれにおいても、大半の教師は「うまくいっており、課題はない」と現状を評価している。
- ◎しかし、連携の取り組み内容を詳しく見ていくと、中学生が高校を見学する機会を設けたり、中学生に関する情報を高校に共有したりする取り組みは比較的多く行われている一方、教師がお互いの授業を見学したり、合同研修を行ったりするなどの、指導内容にまで踏み込んだ取り組みができていないところは少ない。
- ◎そうした現状の背景として、中高での指導観の違いや、その違いを認め合い、ともに考える姿勢の不足が連携の壁となっている。

「中高連携」の進め方と価値を考える

実践事例 1

島根県立松江北高校
同松江南高校
同松江東高校
松江市全中学校
【P.6~9】

中高連携の概要

- ◎県全体の学力向上を牽引すべく、松江市の公立普通科高校3校と市内の全中学校が、研修会を年1回開催。
- ◎学力や学習状況、教育環境の変化など、幅広い視点での情報共有を進めるとともに、テーマを設けた意見交換等も行う中で、双方の指導に関する課題や思いへの理解が深まり、ともに解決策を考えていける関係が構築されている。
- ◎今後は、若い世代に引き継ぎ、継続・発展させていくことが課題。

連携のポイントと、そこから生まれている価値

- ◎互いの指導の成果やよい点を尊重しながら、情報共有を進めることが重要。その中で、中高で共通の課題や目標が明確になり、県や市全体として抱えている教育課題の解決につなげることができる。

実践事例 2

熊本県立
宇土中学校・高校
【P.10~13】

中高連携の概要

- ◎少子化が進み、学区再編に伴い市街地への生徒流出が懸念される中、地域の拠点校としての求心力を高めるべく、中高一貫教育校となった。
- ◎高校籍の教師が中学校で授業を行ったり参観したりすることで、中学校と高校の指導の違いを実感し、中学校での学びの実態を踏まえた指導改善に結びつけている。

連携のポイントと、そこから生まれている価値

- ◎互いの指導を実体験することが重要。その中で、目の前の生徒に関する課題の背景や理由が明確になるとともに、中学校での指導の流れをくんだ高校での指導を実践することにつながり、6年間を通して、生徒の力を最大限に伸ばしていくことができる。

これからの「中高連携」のあり方を考える

これからの
「中高連携」のあり方を
語る
【P.14~17】

中高と地域が連携し、生徒がこれからの時代を生きる力を豊かに育む

中学校、高校
校長



古河市立
総和北中学校 校長
森田泰司



茨城県立
古河第三高校 校長
福島克郎

保護者



古河市立
総和北中学校
PTA会長
篠崎克佳



古河市PTA連絡協議会
前会長
鶴見尚司

現状把握

中高連携の現状と 真に求められるかたち

生徒の学びの連続性を確保するための中高連携の必要性が今、注目されている。中高連携の目的、難しさ、そして求められるかたちはどのようなものか、調査データと読者の声から考える。

学びの連続性が 一層求められる時代に

変化の激しい社会を生きる上で必要な力を育成するため、すべての学校段階でアクティブ・ラーニングの導入などの教育改革が進む中、幼小、小中、中高、高大の学びの連携・接続がこれまで以上に重要になってきている。高校現場の教師も、学校段階ごとの特徴を踏まえた学びの連続性の確保について深い関心を持っているようだ。(P.2)

ベネッセ教育総合研究所が各学校段階の教師に、下の学校段階との連携・接続の状況（高校の場合であれば中学校との連携・接続）について聞いたところ、大半の教師が「とて

もうまくいっており、課題はない」「まあうまくいっており、課題は少ない」と現状を評価している(図1)。しかし、「あまりうまくいっておらず、課題がある」という評価も学校段階が上がるにつれて増加していることや、中学校教師が高校との交流に関して「盛んである」と感じている割合は低い(図2)ということから、中高連携において何らかの課題が存在していることがうかがえる。

連携が進む一方で その中身に課題が

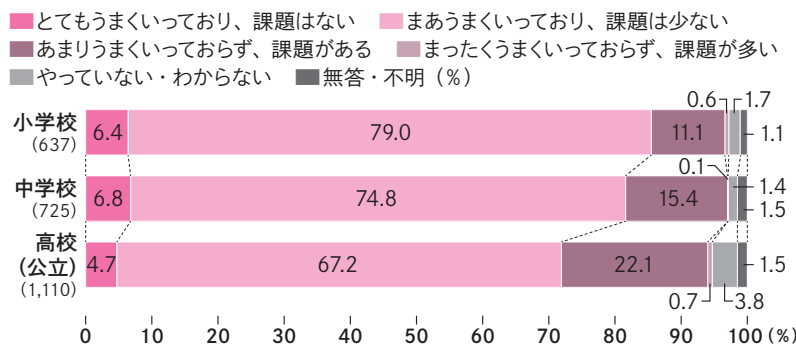
『VIEW21』高校版の読者の声やほかの調査データを見ていく中で、その課題が浮き彫りとなってきた。

図3を見ると、中学生の高校見学

や中学校からの生徒情報の共有は比較的多くの中学校・高校間で行われているが、互いの指導内容にまで踏み込んだ取り組みができていないところはまだまだ少ないようだ。特に、高校教師が中学校の授業に乗り入れたり、授業を見学したりする機会は多くはない。そのようなところに課題を感じている声もある。(以下、太字は『VIEW21』高校版読者モニターの声)

- 高校教師は、高校以外の教育の実態について知らないのが現状。教科指導に注目しても、絶対評価がどのような影響を生徒に与えているのか、発展内容についての扱いはどの程度行われているのかなど、答えられないことが多い。(広島県・公立)
- 高校の教師は、学習面を中心に、

図1 下の学校段階との接続・連携の状況について (2016年)



※それぞれ下の学校段階との連携（高校の場合は中学校との連携）に関する評価を表す
出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

中学校でどのような内容をどの程度学んでいるのかを、もっと知る必要がある。
(埼玉県・公立)

● 中高間での学習の積み上げ、体系化が難しい。
(愛知県・公立)

● 中学校での学びの実態についてよく知らない。
(神奈川県・公立)

様々な違いの壁を乗り越え 6年間の学びをつなぐ

指導内容に踏み込んだ連携が進まない理由として、そもそも中高が連携して教科指導などについて学び合うための時間が取れないといったこととのほかに、中学校との指導観の違いや、その違いを認め合い、ともに考える姿勢が不足していることなどを挙げる高校教師も少なくない。

● 中高連携の研修会を行うが、「指導方法」について議論がかみ合わない。「指導内容」を話し合う場合も、高校側は「中学校段階でここまで定着をさせてほしい」などと学力不足の原因を中学校での指導に探しがちだ。ただ、それは大学との関係で高校が置かれる立場と同じだ。生徒

のためになる中高連携のあり方を模索したいというのが本心だ。
(鹿児島県・公立)

● 中学校と高校は別世界と言ってもよい。それでも中学校と高校の違いを認め合い、よい部分を取り入れることができれば、高校の指導の質は上がっていくと思う。
(岡山県・公立)

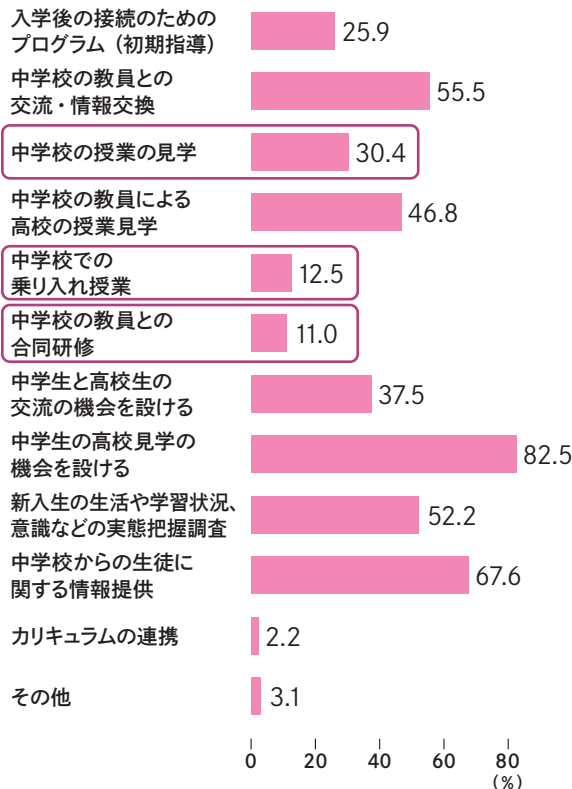
まずは、中高の違いを認識し、認め合うことから、中高連携は始まるのではないだろうか。様々な違いの壁を乗り越え、ともに生徒を育てていくことから生まれる価値は大きいはずだ。

● 学力と生徒指導に関してスムーズな連携が行われ、地域で子どもを育てる意識が醸成できることに大きな価値がある。
(北海道・公立)

● 生徒が1人の人間として成長するために、生徒に寄り添った連続性のある指導が必要だ。
(広島県・公立)

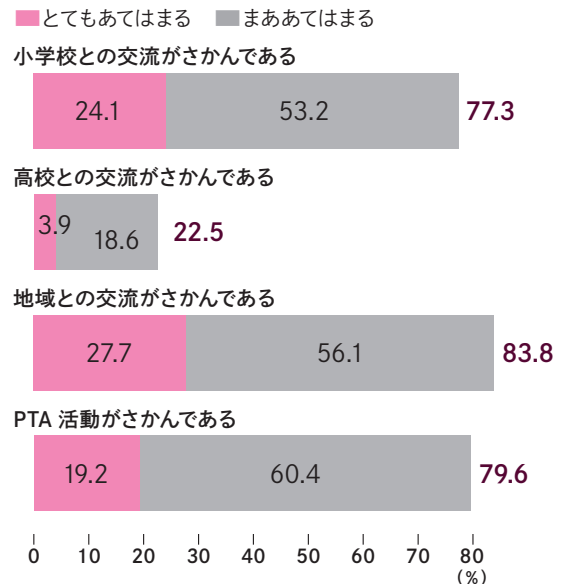
次ページからは、試行錯誤を経ながらも、学びと指導の連続性を深める中高連携の取り組みを実践している事例を紹介する。

図3 高校における中学校との連携・接続状況 (2016年)



出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

図2 中学校の学校段階を超えた連携・接続状況 (2016年)



出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

公立普通科3校と市内全中学校が 学力向上の課題や教育への思いを共有

島根県松江市では、2009年から、市を代表する公立普通科高校3校が中心となり、市内にある公立・私立の全中学校との中高連携事業を推進している。

模試のデータを基にした学力・学習意識の課題から、大学入試改革に伴う環境変化まで幅広く情報を共有。中学校と高校間の「壁」を感じながらも、それを乗り越え連携を深めてきた「三校会」の軌跡を追う。

生徒の現状把握・共有を 目的として「三校会」が発足

島根県松江市では、2009年から毎年6月、島根県立松江北高校、同松江南高校、同松江東高校の普通科を持つ3校（以下、3校）と、公立・私立の全中学校が一堂に会して、「松江市内中高教科・進路指導研修会」（以下、研修会。松江市内三校教科・進路指導協議会が主催）を実施している。3校で行われたベネッセの進研模試やスタディーサポートの結果を基に、3校に進学した生徒の現状や課題を中学校側に知ってもらうと

もに、中学校の取り組みを高校側が把握することで、中・高のスムーズな接続を目指している。

研修会を提案したのは、当時松江東高校の進路指導部長を務めていた永瀬嘉之松江東高校校長だ。松江市では、以前から中高連絡会が開かれていたが、そこで共有されていたのは高校入試や高校1年生の生徒指導に関する情報が主であり、学力や学習状況について話し合われることはなかった。そうした中、ある年の会で永瀬校長が自校の模試の結果を示したところ、中学校側から「高校生の学習のつまずきを解消するため

には、中学校時代の指導が重要ではないか」といった前向きな意見が出された。「学校種や学区を超えた情報交換の場を持つことにより、市全体で学力向上への意識を高められるのではないか」という思いが、3校による中高連携の取り組みに結実した。永瀬校長は、研修会のねらいを次のように語る。

「県全体の学力向上を考えた時、県を中心とする松江市が課題意識を持つ必要があります。3校の生徒の大半が大学進学を希望しており、中学校でも、そうした生徒の将来を見通した指導をしていただくことが重

要です。中高連携がすぐに指導改善につながると思いませんでしたが、少なくとも高校生の現状を中高で共有することが必要だと考えました」
そうした課題認識の下、09年6月、松江南高校を幹事校とする「三校会」（松江市内三校教科・進路指導協議会）が発足し、市内全中学校との連携事業が始まった。

高校での模試・アセスメント の結果を中学校の指導に活用

研修会の参加者は、中学校は管理職または前年度3学年の担当教師、高校は管理職・進路指導部・1学年

担任。さらに、オブザーバーとして、島根県教育委員会の学力向上事業の担当者が加わる（P. 8 図1）。

研修会の目的は高校1年生の学力や学習状況の把握であるため、ベネッセの営業担当者も参加し、進研模試やスタディーサポートの結果を基にした学力や家庭学習時間、学習意欲などの現状が報告される。毎回中学校側が注目しているのが、スタディーサポートで分かる学力と学習



島根県立松江北高校校長
泉雄二郎 いずみ・ゆうじろう
教職歴37年。同校に赴任して3年目。「社会貢献意識と学問への憧れを取りに行く学びにつなげたい」

島根県立松江北高校

- ◎2017年に創立141周年を迎える。旧制松江中学校を前身とする進学校。創立以来、4万人を超える卒業生が行政・医療・経済・芸術など幅広い分野を牽引している。
- ◎設立 1876（明治9）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大、東京大、京都大、大阪大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大、島根県立大などに188人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ295人が合格。
- ◎URL <http://www.matsuekita.ed.jp>

習慣の関係（P. 8 図2）だ。その結果分析によると、松江市内の高校1年生には「学習はそこそこするけれども、成績は伸び悩んでいる生徒」

が多い傾向にあり、そうした生徒にはまず、学習法の改善指導が必要となる。一方、「あまり勉強はしないけれども、成績はよい生徒」も比較的多く、そのような生徒はその後の成績が下がりやすいため、できるだけ早めに手をかけて、学力を維持さ



島根県立松江南高校校長
長野博 ながの・ひろし
教職歴36年。同校に赴任して2年目。「困難から逃げず、生徒に正対して、多くを語っていきたい」

島根県立松江南高校

- ◎1961年、県立松江高校が南北に分かれて創立された。校訓は「質実剛健」「創造進取」「和敬共栄」。「文武両道」を校是として、部活動においても活発に中高連携を進めている。
- ◎設立 1961（昭和36）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東京大、大阪大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大、鳥取環境大などに200人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ235人が合格。
- ◎URL <http://matsue-minami.ed.jp>

せる工夫が求められる。そのような内容が研修会で共有され、中学校は指導改善に生かしている。

中学校の取り組みを 評価しつつ課題も伝える

今では中学校の管理職も積極的に参加し、前向きな意見交換がされているが、初期の頃は一般の教師のみが参加する中学校もあり、研修会の雰囲気は重苦しいものだった。県の



島根県立松江東高校校長
永瀬嘉之 ながせ・よしゆき
教職歴36年。同校に赴任して1年目。「自立した18歳にして卒業させることを目標に、バランス感覚がある指導を」

島根県立松江東高校

- ◎2017年度に創立34周年を迎える。モットーは「師弟同行」。「松江東高校グランドデザイン」を策定し社会を生き抜く力の育成を図る。授業集会、行事前の「黙想」を取り入れている。
- ◎設立 1983（昭和58）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、大阪大、神戸大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、山口大、県立広島大などに102人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ246人が合格。
- ◎URL <http://www.matsuehigashi.ed.jp>

校長会会長も務める松江北高校の泉雄二郎校長は、こう振り返る。

「中学校の先生方は模試の活用慣れしておらず、教育に数字を持ち込むことへの嫌悪感が見られました。高校側としては現状を共有したいだけなのですが、家庭学習時間の不足や基礎学力の低下などの話が出る度に、中学校批判と受け止められ、反論されることもしばしばでした」

中学校側が消極的だった理由は、普通科高校進学者は全体の3分の1に過ぎず、そのためだけに集まる意義を見いだしにくいことにあった。

「専門高校もあるのに、なぜ普通科高校とだけ連携するのかといった思いは当然だと思います。そうした意識は今も少なからずあり、この点を克服することが、中高連携の成否を分けると考えています」（泉校長）
そうした中高の意識の違いも、話題が学力一辺倒にならないよう工夫することで、次第に解消していった。泉校長は、中学校の取り組みを尊重する大切さを指摘する。

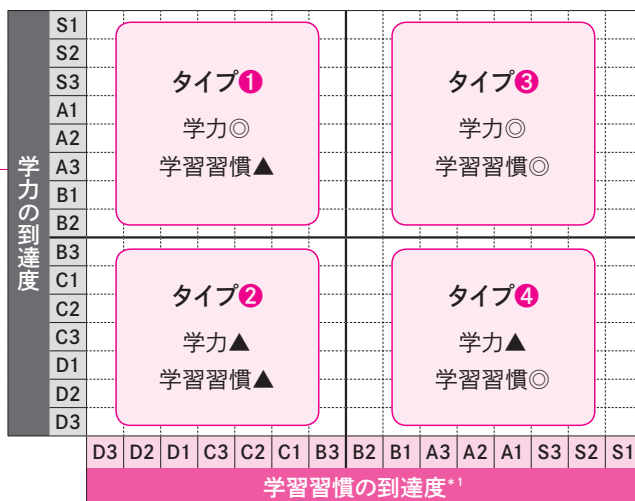
「以前は、模試の偏差値推移を示

図1 2016年度「松江市内中高教科・進路指導研修会」概要

- ◎プログラム
- 1 「松江3校の現状の報告」
ベネッセコーポレーション営業担当
 - 2 「小学生・中学生の学力の現状と今後求められる学力について」
島根県教育委員会教育指導課学力育成スタッフ上席調整監
 - 3 「算数授業改善PTからみえるもの」
島根県立松江東高校校長 永瀬嘉之
 - 4 グループ別意見交換
- ◎参加校・人数
- 島根県教育委員会3人/島根県教育センター2人/島根県立松江北高校7人/島根県立松江南高校7人/島根県立松江東高校5人/松江市立女子高校2人/松江市立第一中学校1人/松江市立第二中学校1人/松江市立第三中学校1人/松江市立第四中学校1人/松江市立湖南中学校2人/松江市立湖東中学校1人/松江市立湖北中学校1人/松江市立島根中学校1人/松江市立美保関中学校1人/松江市立八雲中学校1人/松江市立玉湯中学校1人/松江市立宍道中学校1人/松江市立東出雲中学校1人/私立開星中学校3人
- *「松江市内中高教科・進路指導研修会」の資料を基に編集部で作成

して『進学実績がよくない学年は、入学時の学力が低いので、中学校卒業時まで学力をつける必要がある』といった論調で話していました。しかし、できていない点を指摘するだけでは、中学校側が反発するのは当然です。『スタディーサポートの結果を見ると、高校1年生の多くは中学校段階で学習習慣は身につけている。それを学力に結びつけるためにはどうすればよいか』といったように、中学校の指導の成果やよい点を伝えた上で、課題や解決策を一緒

図2 学力と学習習慣のバランスによる4象限



*1 学習習慣の到達度は、「学習状況リサーチ」の質問項目で学力と相関の高い項目を点数化し、S1～D3に分類した。
*「松江市内中高教科・進路指導研修会」の資料を基に編集部で作成

に考えるようにしたところ、共感を得られるようになりました」

互いを認め合うことが、中高連携の第一歩になるのである。

大学入試改革の動向や小中連携にも言及

国や県が進める学力向上に関する施策も共有する。15年度の研修会では、大学入試での英語の外部検定試験の活用やスピーキングテストの導入など、大学入試改革について英語を中心に説明し、それに直面する現

中学1・2年生では英語4技能の指導の強化が重要になると中学校側に訴えた。松江南高校の長野博校長は、「中学校では、センター試験までは視野に入れても、大学が個別に行う入試はあまり意識されていません。大学の個別入試で英語の外部検定試験の活用が進んでいる現状などは、中学校の先生方にとって驚きだったのではないでしょうか」と手応えを語る。

16年度の研修会では、県の高校数学会の会長も務める永瀬校長が、算数・数学をテーマに講演。島根

県は算数が好きという小学生が全国で最も少ない県といった調査結果などを伝えた。そこには小中連携も進めていく必要があるというメッセージを込めていたと、永瀬校長は語る。

「小学校でのつまづきが、中学校で解消されないまま、高校に持ち越されることは少なくありません。講演では、私が見てきた小学校の実態を語り、小中、中高の連携を、一貫性を持って進めていく必要性を伝えました。小中高の学びが連続してこそ、松江市全体の学力の底上げが図られ、3者がWIN-WINの関係になることを、皆で進めていかなければならないと考えました」

中高が刺激を与え合う意見交換

研修会では意見交換も行う。16年度は、参加者が1グループ7～8人ずつに分かれ、「学力向上」をテーマに各校の取り組みや教育への思いについて語り合った。

「率直に語り合ったことで、中学校の先生方がどのような授業をされているのかや、抱えている課題、悩みなどがよく分かりました。双方の

教師にとって満足度が高い会になったと思います」(長野校長)

長野校長がいたグループでは、教科指導のノウハウを持った高校側から、生徒の学習意欲を高めるコツが語られ、中学校の教師を引きつけたという。また、永瀬校長のグループでは、特別支援を要する生徒に対する中学校の指導の実情が語られた。

「本校にも支援が必要な生徒がいますが、中学校の生徒はさらに多様です。中学校の先生方のきめ細かな指導内容を知ることができ、大変参考になりました。学習面だけでなく特別支援も含めた情報を共有し、高校が指導を受け継ぐことが重要だと、改めて感じました」(永瀬校長)

学校ごとの中高連携により 教科での直接交流も始まる

研修会で築いた中高の関係は、各学区内の連携に発展している。3校とも、中学校の教師が高校の授業を自由に参観できる公開授業を実施。さらに、松江南高校では、夏季休業期間に3日間、中学3年生を対象と

した補習指導「南高サマースクール」を行っている。これは、1日50分×3コマで、1日目の1限目は社会・数学、2限目は国語・理科といった時間割を作り、各教科担当を配置。中学生は同校に各自教材を持ち込んで当該教科を自習し、分からないことが出てきたら教師に質問する。当初は中学校1校との取り組みだったが、中学校側の希望により、参加校は3校に増え、16年度は3日間で延べ148人が参加した。

「サマースクールでは、初めて会う中学生に、その場でつまずきの原因を見つけ、それぞれに合った指導をしなければなりません。中学生の理解度や学力レベルがつかめるだけでなく、自身の指導力向上にもつながるため、先生方は前向きに取り組んでいます」(長野校長)

ただ、どの学区においても、中学校側が多忙なため、公開授業の参観者は伸び悩んでいる。そこで、松江東高校では、まずは数学・英語で連携を深めようと、年数回、英語でディベートを行う授業に中学校教師がア

ドバイザーとして参加し、また、高校入学前に取り組む数学の教材を中高共同で作成しようとしている。今後は国語でも連携を深め、読解力向上を図っていききたいと、永瀬校長は語る。

「『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』の国語で記述式の問題が導入されることを見据え、逆算して小・中学校で今何をすべきかを考えなければなりません。中高の教師が共同で中学校の作文指導や定期考査の問題を考えることにより、高校入学時に始める学習のレベルが上がると期待できます。さらに、読解力の向上は、数学・理科の学力向上にも波及していくと期待しています」

中高が目標やゴールを 共有することが大切

今後の課題の1つは、「三校会」を若い世代に引き継いでいくことだ。「参加校が1校も抜けずに、研修会を続けてきたことは最大の成果です。8年間で築いてきた中高連携の活動をさらに発展させるためにも、若い先生方が中心となり進めていっ

てほしいと考えています」(泉校長) 学習面だけでなく、生徒指導についても取り上げていく考えだ。

「不登校や特別支援への対応は、中高共通の課題です。保護者も巻き込んで市全体で考えていく必要があります」(長野校長)

中学校と高校が目標を共有することが、今後の中高連携の鍵になると、永瀬校長は語る。

「これまでの連携を通して、中間でそれぞれの問題意識は共有できるようになりました。今後は、『どんな生徒を育てたいか』といった目標やゴールを中高で共有することが連携の鍵になると考えています。例えば、『地域で活躍できる人材を育てること』を目標に据えた場合、その目標達成のためには基礎学力に加え、思考力や問題発見・解決力を身につけさせる必要があります。そのように、目標を共有することで、それに向かつて何をすべきか、具体策まで話し合えるようになるでしょう。そういった視点で、今後も中学校とますます議論を深めていきたいと思っています」

中高連携で、学びに連続性を持たせ 中高の指導改善につなげる

熊本県の公立高校の学区再編に伴い、県央の拠点校として設立された熊本県立宇土中学校・高校。高校教師による中学校での乗り入れ授業や、

「総合的な学習の時間」において中高6年間のプログラムを進める「宇土未来探究講座」など、中高が連携して生徒の学びに連続性を持たせ、生徒の力を最大限に伸ばす指導が行われている。

学区再編の影響による 成績上位層の流出が課題

旧制宇土中学校を前身とする熊本県立宇土中学校の敷地内に、熊本県立宇土中学校が開校し、県内初の併設型公立中高一貫教育校が誕生したのは2009年のことだ。この年、同県では公立高校の学区が再編されて従来の8学区から県北・県央・県南の3学区となり、宇土高校のある宇土市は、隣接する熊本市と同じ県央学区に組み込まれた。少子化に伴って同校への志願者も徐々に減り、さらに成績上位層の中学生が熊本市の

進学校に流出することが懸念される中、県の特徴ある学校・新しいタイプの学校づくりが進められ、同校は、地域の拠点校としての求心力を高めるべく、中高一貫教育校となった。

中学校は1学年2クラス、高校は外部進学の4クラスが加わり計6クラス。中進生（内進生）と高進生（外進生）は高校卒業まで別々のクラスで学び、2年次から、前者は文系コースとSSコース、後者は文系・理系・SSコースに分かれる。

教員組織は中学校籍・高校籍に分かれており、中学校から高校への教育の連続性を持たせるよう、異動を

進めている。

中学校の授業から受けた 驚きが、AI導入の契機に

中高連携の柱の1つとして進められているのが、高校籍の教師が中学校の授業も行う乗り入れ授業だ。中学校の全教科で、高校教師が授業の一部を受け持っている。乗り入れ授業の主なねらいは、高校教師が、中学校の指導内容や生徒の学習状況を把握するとともに、中高の授業改善につなげていくことにある。

例えば英語では、習熟度別に3クラスで展開している中学2・3年生

の授業に高校教師も入る。また、体育では、毎時間、中学校のすべての授業を中学校籍と高校籍の教師がチーム・ティーチング（以下、TT）で行う。乗り入れ授業の意義について、長く県立高校で指導し、同校では中学校の進路指導主事を務める橋本慎二先生は、次のように語る。

「乗り入れ授業を行うと、中学校での指導内容が分かるだけでなく、高校教師として中学生に教えておきたいと思うことを指導することもできます。また、教科ごとに行う授業研究会などでは、中学校教師も高校教師からよい刺激を受けています」



熊本県立宇土中学校・高校
橋本慎一 はしもと・しんじ
 教職歴28年。同校に赴任して13年目。
 中学部副主任。中学校1学年主任。
 中学進路指導主事。



熊本県立宇土中学校・高校
内田晴龍 うちだ・せいりゅう
 教職歴28年。同校に赴任して8年
 目。中学部主任。中学校2学年主任。
 中学生徒指導主事。



熊本県立宇土中学校・高校
後藤裕市 ごとう・ゆういち
 教職歴11年。同校に赴任して5年目。
 研究開発部。SSH研究主任。「縁を
 結び、新しい関係を創り出す教育を」



熊本県立宇土中学校・高校
吉永晃紀 よしなが・ゆうき
 教職歴32年。同校に赴任して4年目。
 研究開発部。GdL研究主任。「The
 world is what you think it is」



熊本県立宇土中学校・高校
高木和彦 たかき・かずひこ
 教職歴32年。同校に赴任して4年
 目。進路指導主事。「生徒とともに、
 創造性豊かに志高く切磋琢磨する」

理科では、13年度のSSHの指定を機に、中高の学習内容の融合を強化している。学校設定科目で設けた「未来科学」の授業は、中高の教師が共同で作成したシラバスで授業を進め、高校教師が中学校の授業にTとして入ることも多い。「中学校

の先生と共同で授業を行う中で、中学校と高校の違いをより明確に実感しました」と、SSH研究主任の後藤裕市先生は語る。

「中学校と高校の指導では、授業のつくり方や50分間の使い方など様々な面で違いがあります。また、高校1年生には伝わる説明の仕方でも、中学3年生には伝わらないこともあり、教え方の面でも違った工夫が必要です。特に驚いたのは、中学校では実験や活動の比重が非常に大きいことです。高校では講義型の授業が中心となるため、高校進学後に中学

熊本県立宇土中学校・高校

- ◎2009年に中学校を開校し、県内初の併設型公立中高一貫教育校となる。11年に文部科学省「中高生の科学部活動振興プログラム」、13年にSSHの指定を受ける。
- ◎設立 1921（大正10）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
 国立大は、筑波大、東京大、名古屋大、広島大、九州大、熊本大、鹿児島大、熊本県立大などに83人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大などに延べ272人が合格。
- ◎URL <http://sakurai.higo.ed.jp/sh/units/>

校の授業とのギャップを感じ、高校で理科が苦手となる生徒が増える理由を実感しました。中進生がスムーズに高校の理科に移行できるように、中学校での授業を踏まえて、高校の授業のあり方も変えていく必要があると感じています」

同校に赴任して以来、後藤先生の授業では、実験を通して考えさせたり、ワークシートを使ってペアワークをさせたりする機会を増やすなどの工夫をしているという。

英語科の吉永晃紀先生も、中学校の授業に影響を受けて、自身の授業を変えた。

「本校に赴任して、講義中心の授業から、プレゼンテーションソフトなどのICTを活用し、生徒が活動する授業に変えました。中学校の授業を実際に見る機会がなければ、自分の授業を変えようとは思わなかったでしょう」（吉永先生）

学習内容や授業方法だけでなく、生徒と教師の人間関係を築く上でも、高校教師が中学校で授業を行う意義はあると、吉永先生は語る。

「中学生が高校入学前に高校の教師と顔見知りになっておくことで、入学直後からスムーズに授業を進められます。生徒にとっては、中高のギャップを減らすことにもつながっています」

体験型の「宇土未来探究講座」で主体性や探究力を養う

中高が教育活動を連続させるよさを教師が最も実感しているのが、6年間を通した科学的探究活動を行うためのプログラム「宇土未来探究講座」だ（P.12図）。

中学校3年間の「宇土未来探究講座」では、自ら課題を発見し、目標に挑戦する姿勢を養うことをねらいとして、体験型プログラムを中心とした「野外活動」「地域学」「キャリア教育」を行う。著名な棋士を招き論理的思考力や大局観を養う「囲碁教室」（中学1～3年生）、他者とのかわりや自然の中で生活の基礎を学ぶ「御所浦わくわく島体験」（中学1年生）や「阿蘇自己再発見キャンプ」（中学2年生）、水と米とつり

竿だけを持って無人島で自給自足生活を行う「無人島サバイバル生活体験」(中学3年生)など、ユニークで多様な活動を、「総合的な学習の時間」(年間70時間)で行っている。

『宇土未来探究講座』のプログラムを作る時、常に念頭に置いているのは『いかに生徒を悩ませるか』ということです。本プログラムは、社会で生きる力の育成を主目的としていますが、ここで培われる、困難を乗り越える粘り強さやチャレンジ精神は、高校生活だけでなく、大学入試や大学生活でも必ず役に立つと信じています(橋本先生)

また、それぞれの活動を行う前にテーマを決めて調べ学習を行い、事後の報告会や発表会も実施している。その際、プレゼンテーションソフトや調査データを用いたプレゼンテーションスキルを学び、体験を言語化することで表現力を身につける機会が豊富に設けられている。

中学3年生の12月からは、3年間の集大成として「卒業論文」に取り組み。各自がテーマを決めて情報収集を行い、担当教師と相談しながら論文を作成し、3学期にポスター

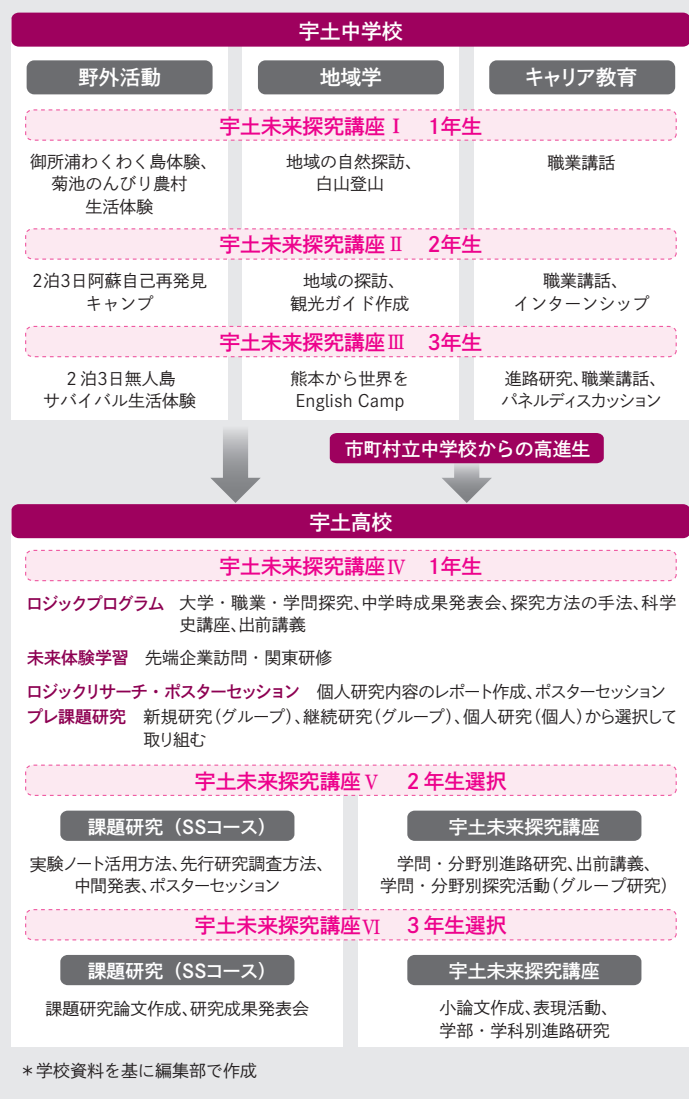
セッションを行う。テーマ設定、情報収集、論文作成という、高校でも行う課題研究の流れを経験する。

こうした中学校での学習を受けて、高校の「宇土未来探究講座」では、さらに高度な内容で、グループによる課題研究に取り組む。1年次にブレ課題研究、2・3年次に本格的な研究を行い、海外研修や各種学会、コンテストへの出場などを旨とする。進路指導主事の高木和彦先生は次のように述べる。

「中学校の卒業論文で追究したテーマを高校の課題研究でも取り上げて学びを深めていく生徒もいます。そうした学びの継続性が持てるのも、中高連携のよさだと思っています」

「無人島サバイバル生活体験」では、中学生のグループに高校1年生がサポート役として1人ずつ入る。

「宇土未来探究講座」6年間のプログラム



事前にリーダーシップの研修を受けた高校1年生は、現地でも野外活動の専門家から指示の出し方などを学びつつ、中学生をリードする。実施後、「指導者側の大変さが分かった」といった声も多く、生徒のリーダーシップ力を高める場となっている。

中学校で培った力を土台に 高校では内容を深める

中学校時代に多様な活動を経験さ

せる指導を引き継ぎ、高校では自ら関心を持ったことに挑戦させ、より深い学びを追究させていく指導に努めていると、吉永先生は語る。

『トビタテ！留学JAPAN』(※1)など、国際交流関係のプログラムを紹介すると、真っ先に応募してくるのは中進生です。多様な体験を積み重ねてきたことで、新しい取り組みにも抵抗なく飛び込んでいくのでしょ。チャンスを生かし

※1 正式名称は、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」。2014年にスタートした官民協働で取り組む海外留学支援プロジェクト。高校生を対象とした「高校生コース」もある。

で自分の糧にしていく意欲を育む上で、『宇土未来探究講座』が果たす役割は大きいと思います」

後藤先生も、生徒の主体性を重視した指導を行っているという。

「私が実験テーマを示すだけで、生徒は自ら計画を立てて実験を行い、探究型学習を進めていきます。また、中学校での様々な活動経験から、身近なことに疑問を持つ力が培われており、課題研究でのテーマ設定も自分で進められます。そのため、高校の課題研究では、テーマ設定やプレゼンテーションに関する指導よりも、内容を深く掘り下げる指導に十分な時間を充てることができています」

このように、指導の効率化を実現できるのも、しっかりと中学校の取り組みに目を配っているからだ。高校籍の教師は、中学校の報告会や発表会にも参加し、生徒がどのような力を持っているのかを把握している。中学3年生が卒業論文のテーマを設定する際には、高校籍の教師も生徒と面談をし、より専門的な観点

からアドバイスをする。

「中学生の実態を把握することで、高校の課題研究においても中学校の成果を踏まえた指導を行うことができるのです」（後藤先生）

高進生もそうした中進生の姿に刺激を受け、自身の課題研究を深めていくという。異なる背景を持つ中進生と高進生が切磋琢磨し高め合う雰囲気も、探究活動の質の向上をもたらしているのである。

部活動も中高合同で行い 学校への求心力を高める

同校の課題の1つは、中学校からほかの高校に進学するケースが少なからずあることだ。現状では内進率95%を維持しているが、熊本市内の高校への進学希望者は毎年一定数いる。

「難関国公立大学や医学部への進学を希望する生徒は、進学実績の高い熊本市内の高校に惹かれる傾向にあります。本校としては、生徒個々への指導を手厚くし、進学実績を上げていくことで、求心力を高めていきたいと考えています」（高木先生）

そのために、生徒への日頃の声かけや面談にも力を入れている。

「ほかの高校への進学者が増える」と、『中高一貫の継続した教育』という本校の理念そのものが揺らぐため、ほかの高校への進学を考えている生徒には、できるだけ早い段階から面談などを行って対応しています。本校の理念を語るだけでなく、高校進学後に何をしたいのか、それは本校でも実現できるのではないかと、ということを確認させ、宇土高校の魅力を理解してもらおうように努めています」（橋本先生）

部活動における中高連携も、内進率の安定につながっている。同校の陸上部やハンドボール部、吹奏楽部などでは、中高の生徒が合同で部活動を行っており、野球部も中学3年生の引退後から高校の硬式野球部に加わる。中学部主任の内田晴龍先生は次のように語る。

「顧問に代わって、高校生が中学生を指導する場面も少なくありません。普段無意識にしているバッテリーフォームなどを、中学生が理解

できるように言葉や体で表現する難しさを実感することも多い一方で、中学生への指導は高校生にとっても得るものが多いと思います。高校進学後も部活動を続けてもらいたいという思いもあり、優しく丁寧に中学生に接していることが、我々から見ても分かります」

もう1つの課題は、中高の教師の交流だ。同校では中高全体で1つの職員室とし、学年ごとに机を集めた配置としているが、中高の学校文化の違いもあり、日常的な意見交換や情報共有をさらに活性化させていくことが課題だと、高木先生は言う。

「数学や理科、英語はSSHの取り組みを通して連携を深めており、その他の教科でも同様に中高の交流を進める必要があります。本校がさらに飛躍するためには、人事交流を活発に行い、中高の相乗効果を高めていくことが大切です。人的交流システムの構築、意見交換の場や時間の設定などの工夫で、中高6年間を通して『宇土で育てる』教育をさらに充実させていきたいと思っています」

これからの
「中高連携」の
あり方を語る

中高と地域が連携し、 生徒がこれからの時代を 生きる力を豊かに育む

社会の変化とともに教育のあり方も変化する中で、中高連携には何が求められているのだろうか。中高連絡協議会を発足させ、定期的な交流を図るなど、中高連携に積極的に取り組む茨城県古河市の中学校・高校の校長、そして地域の保護者が、中高連携のこれからについて語り合った。

中高の教師の対話

よりよい学びの構築を目指して

市内の中高が 「地教地育」で連携

森田 昨年度、茨城県古河市内の中高連携活動として、9つの中学校、5つの高校、そして1つの県立中等教育学校の校長15人で組織する「古河市内中学校長・高等学校長協議会」が発足しました。この協議会は、地域の子どもたちを地域で教育し、地域で育てる「地教地育」を目指すものです。従来、地域における中高連

携は、中高の教師にPTA会長や警察、民生委員などが加わった、生活指導を主目的とした取り組みが中心でした。しかし、この協議会では、生活指導にとどまらず、学力保障や地域活性化など、幅広い視野で、中間の情報交換を行っています。
福島 古河市は東京都や埼玉県などへの交通アクセスがよいため、近年は、地元の高校ではなく県外の高校に進学する生徒も増えています。この状況に対する危機感が協議会発足

へとつながりました。生徒の県外流出に歯止めをかけるというねらいもありますが、現実として地元に進学する子どもが減り高校の入試倍率も低くなる中で、多様化・多層化が進む生徒たちと向き合うためには、高校として中学校で行われている指導を知る必要があります。
森田 協議会の活動の中で、私たち中学校教師が特に興味深く取り組んでいるのが、高校の授業参観です。高校で行われている授業の様子や、私たちが送り出した卒業生が学習に取り組む様子を知ることができるといえるのは、非常に貴重な機会で



す。特に、中学校では活躍する場面が少なかった生徒が、高校では生き生きと授業に参加し、クラスでもリーダー的な存在になっている姿を見た時は、「この高校に送り出して本当によかった」という大きな喜びを感じました。そして、中学校の三者面談などで「先輩がこの高校で立派に活躍しているよ」と生徒、保護者に話すことにより、進路指導の納得感をさらに高めることができてい



古河市立総和北中学校 校長
森田 泰司 もりた・やすし

教職歴33年。同校に赴任して1年目。「真の意味での『子ども一人ひとりのために』。教育はまさに『人づくり』そして『国づくり』」。

古河市立総和北中学校◎1978（昭和53）年創立。校訓「礼節・鍛錬・克己」のもと、歴史と伝統を大切に引き継ぎ、地域や保護者の期待に応える教育活動を進める。文部科学省ICT教育研究協力校。

ます。

福島 高校生の様子を見た中学校教師の喜びを高校教師にも伝えてもらうことは、高校教師の指導の原動力にもなっています。また、高校の授業参観には、中学校の教師だけでなく、協議会に参加するほかの高校の教師も参加します。実は高校教師にとっても、ほかの高校の授業を見る機会というのはほとんどないのが実情です。生徒の志望や学力が異なる



茨城県立古河第三高校 校長
福島 克郎 ふくしま・かつお

教職歴36年。同校に赴任して2年目。「常に生徒のためを第一に考える」「困難から逃げると、より大きな困難が追ってくる。だから逃げない」

茨城県立古河第三高校◎1969（昭和44）年創立。2016年度入試では、国公立大は、茨城大、埼玉大、千葉大、九州大などに50人が合格。私立大は、青山学院大、法政大、明治大などに延べ574人が合格（現浪計）。

る学校が、同じ地域の生徒を育てようとしている様子に直に触れることで、ともに地域の子どもを育てているのだという連帯感が増します。また協議会では、中高の教師が互いの学校のことをざっくばらんに語り合う機会も設けられていますが、中学校教師と話していて、特に高校との違いを感じるのは、生徒との距離の近さです。もちろん生徒数の違いもありますが、ここまで生徒一人ひとりのことを知っているのかと驚きました。そして私たちは、中学校でこんなに大切に育てられてきた生徒を引き継いで預かっているのだという責任の大きさを改めて感じています。

教育改革が進む中、 中高連携はさらに重要性を増す

森田 中学校教師の側も、高校の様子をもっと知りたいという思いはこれまで抱いていました。しかし、高校入試が垣根となり、「ともに生徒を育てる関係」というよりも「選ぶ側と選ばれる側」という意識になっ



2016年9月に実施された古河市内中学校長・高等学校長協議会では、高校を訪問し、英語の習熟度別授業などを見学した。

てしまい、交流が図りにくかったように思います。その結果、中学校の教師の中にも「高校に送り出したら、あとは高校に任せればよい」という意識が少なからずありました。ですから、協議会という制度ができたことで、連携に向けて背中を押してもらえたように感じています。実際、協議会が発足して、中高の管理職が互いの学校を気軽に訪れるようになっていきます。

福島 生徒を間に置くことで、中学校と高校が互いを認め、高め合う

関係へ、そして地域をともに盛り上げていく関係へと大きく進化しているように感じます。

森田 少なくとも、地元の高校を卒業するまでは生徒を見守ろうという意識を中学校の教師が持つことは、地域の教育力を高めることになり、地域の活性化にもつながると思います。

福島 中学校と高校の連携は、近年進む教育改革への対応という意味でも重要だと考えています。特に、アクティブ・ラーニング（以下、AL）が求められる中で、主体的な学びに必要な学習への動機づけと、生徒の志望を実現するための学力保障を両立させるために、高校教師が中学校の授業から学べることは少なくありません。ALという共通のテーマを前に、中高の教師がお互いのよいところを学び、授業力を高め合うことができれば、高い教育力を誇る「中高一貫地域」になれるのではないのでしょうか。

森田 古河市は小中学校がICT教育に先進的に取り組んできました。そこで培ったノウハウは高校でのICT教育の推進にも役立つはず

です。高い専門性を持つ高校の先生が、ALの実践事例や方法論を始めとする授業改善のヒントを中学校の指導からも得ていただき、専門性を土台にした、より魅力的な授業の実現につながればと思います。

福島 中高連携は、これからますます多くの観点で取り組める可能性を秘めていると思います。私は英語科の教師でしたが、以前は中学校の指導に対して一方的に疑問を持つこともありました。しかし、協議会で中学校の教師たちと話す中で、「まずは、中学校での指導の実態とその背景を正しく理解することで、ともによりよい指導のあり方を考えていくことができるのではないか」と考えるようになりました。

森田 公立高校だけでなく、私立高校とのかかわりも、キャリア教育の観点で見直すことができます。例えば、本校の3年生対象の進路学習会では、本校卒業の公立・私立高校の生徒を招いて話してもらっています。先輩たちの生の声を聞くことで、進路実現に向けての心構えや学習方法について考えを深める機会になっていると思います。

教師と保護者の対話

ともに未来をつくるために

多彩な連携、かかわりで生徒に地域への愛着を育む

―地域の中学校と高校の連携を、地域の人々はどのように見ているのだろうか。2人の保護者にも話を聞いた。

鶴見 古河市の「地教地育」という考えは、中長期的な視点での人づくりであると同時に、教育の領域に存在する見えない壁を乗り越えようとする挑戦でもあると思います。教師と保護者の間、中学校と高校の間など、教育現場にはいくつもの壁があります。連絡協議会で中高間の壁を取り除く動きが進んでいく中で、今後は保護者の参加も認めてもらえることを期待しています。

篠崎 古河市のように、都市部への交通アクセスのよい地域にとっては特に、高校進学はその後地元に残るかどうかを決める1つの局面です。地域を守るといふ観点からも、高校にはもつと保護者と子どもに対して学校を開き、教育理念やカリキュラ



ムの特徴、指導の工夫などを公開してほしいと思います。高校からの情報は、その地域の教育力を判断する上で重要な要素ですから。

福島 高校はもっと中学生やその保護者と直接向き合うことが求められていると感じます。実は、中高連絡協議会の活動を経て、本校の若手教師が地域のA中学校に出向き、保護者や生徒たちの進路学習の講師を務

めました。すると、同中学校の3年生に占める本校への入学者の割合が、16年度は増加に転じました(図参照)。私たちが考えていることを、中学生やその保護者の目線で伝えていくことも、これからの中高連携において重要なことです。

森田 大学進学や就職などで、地方の子どもたちが地域を離れるのは仕方がないのかもしれませんが、それまでに地域への愛着を十分に育んだ上で、外の世界に送り出したいと思っています。高校までは「地教地育」で地域への愛着をしっかりと育むことで、たとえば高校卒業後に地域から離れたとしても、いつか地域に



古河市立総和北中学校 PTA会長

篠崎克佳
しのぎき・かつよし

戻りたい、遠くにいても地域に貢献する機会をつくりたいという気持ちを持ち続けられるはずですよ。

次代を担う生徒を中高、地域が連携して育てる

鶴見 地域への愛着は、学校と地域が連携して育むものだと思います。教師の多忙さが社会的な問題になる

中、学校の先生もよき社会人、家庭人として生活を営めるように、我々保護者も先生方の努力や苦勞を知り、時には先生方に代わって行政に様々な要望を伝えていくことが理想です。

篠崎 母校を愛せる生徒を育てる

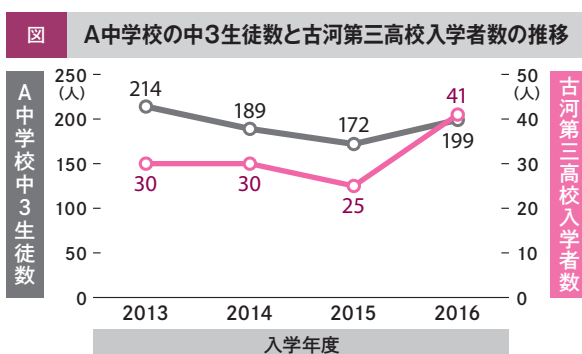


古河市PTA連絡協議会 前会長

鶴見尚司
つるみ・たかし

ことは、次の時代に、その学校を支える保護者を育てることにもつながります。私自身、総和北中学校、古河第三高校の卒業生ですが、どちらの学校にも愛着と誇りを持っていても、変わらずよい学校であり続けられるように協力していきたいと思っています。

福島 地方の公立高校である本校が目指すのは、勉強や部活動、学校行事、そしてともに学校生活を送る仲



古河第三高校の若手教師が地域のA中学校に外向き、進路学習の講師を務めたところ、同中学校の生徒数は減少する中で、入学者数が増加した。

*古河第三高校作成資料を基に編集部で作成

間も大切にできる「バランス感覚のある学校」です。生徒が多彩に潜在能力を発揮できる高校を目指していくためには、中学校や地域、保護者との多角的な連携を図り、たくさん目で生徒を見守り、育成していくことが不可欠です。

森田 小中連携や高大連携に比べると、中高連携はこれまであまり進んでいませんでした。でもそれは、中学校と高校の間に連携が必要ないからではなく、当事者である我々にそうした視点が欠けていたのだと思います。これからの社会は、科学技術がさらに発達し、AI(人工知能)に多くの職業が代替されるとも言われています。人々の働き方や求められる力が変化し続けるからこそ、中学校や高校でもICTを活用したり、AIを推進したりして、生徒に次代を生きるための力を養おうとしています。社会の変化に翻弄(ほんろう)されることなく、主体的に未来を切り開く人材を育てていくために、これからさらなる中高連携を進めていく必要があると思います。

「探究学習」
開発・推進

追跡レポート

育てたい生徒像と個々の行事を 往還的に吟味し、指導の全体像を描く

探究学習及びアクティブ・ラーニング（以下、A L）の開発とともに、教育活動全般の改善に取り組み龍谷大学付属平安中学校・高校。今回は12月に行われた、育てたい生徒像の言語化と、それと並行した学習のコンセプトの具体化をレポートする。

12月●学習のコンセプトの具体化

各行事を探究学習・A Lの観点で検討する

2016年秋から校内のカリキュラム・マネジメント委員会で探究学習・A Lの検討を続ける龍谷大学付属平安中学校・高校。これまでの議論を通して「授業、行事を連携させて、生徒自身に『学びの文脈』を描かせる」「教師が手を離しても学び続ける力を育む」など、探究学習・A Lの意義や目的を校内で語り合ってきた。また、17年度から探究学習・A Lを実際に導入するために、できるだけ既存の教育活動を生かしながらプログラムを開発していくことが方針として確認された。

12月には、各行事・取り組みの内

容と目的を改めて整理し、育てたい生徒像を3年間の成長段階にに応じて具体化し、さらに事前・事後指導を含めた各行事の改善の余地を確認しながら、探究学習・A Lのブランドデザインを描いていった。

一つひとつの行事の内容やねらいを確認する中で、「この2つの行事は、育みたい力が共通しているから連続性を持たせたい」「似た行事が2年続けて行われるが、育てたい生徒像を踏まえると、ねらいは明らかに違う」などと、行事に対する理解が教師の中でさらに深まっていった。そして、各学年の行事と、育てたい生徒像を照

らし合わせることで、学年別の指導コンセプトも明らかになっていった。ゴール（育てたい生徒像）とプロセス（個々の行事）の関係を明示しながら、同校の探究学習・A Lのデザインは、今後「教科学習との連携」というフェーズへと進むことになる。



検討の場に参加する教師の顔ぶれは、学年・教科・分掌を横断するように配慮した。3年間の主な行事が、なぜ現状のような形で存在するのかを確認した上で、今後どう発展させていくべきか語り合った。

これまで取り組んだ内容

11月

学習の
コンセプトの作成

育みたい力と、その実現のための教育活動に関するキーワードを出し合い、コンセプトづくりにつなげました。

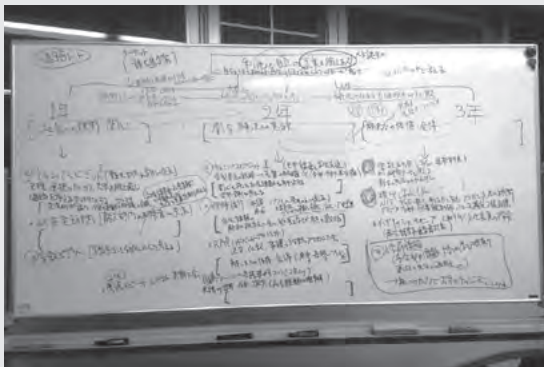
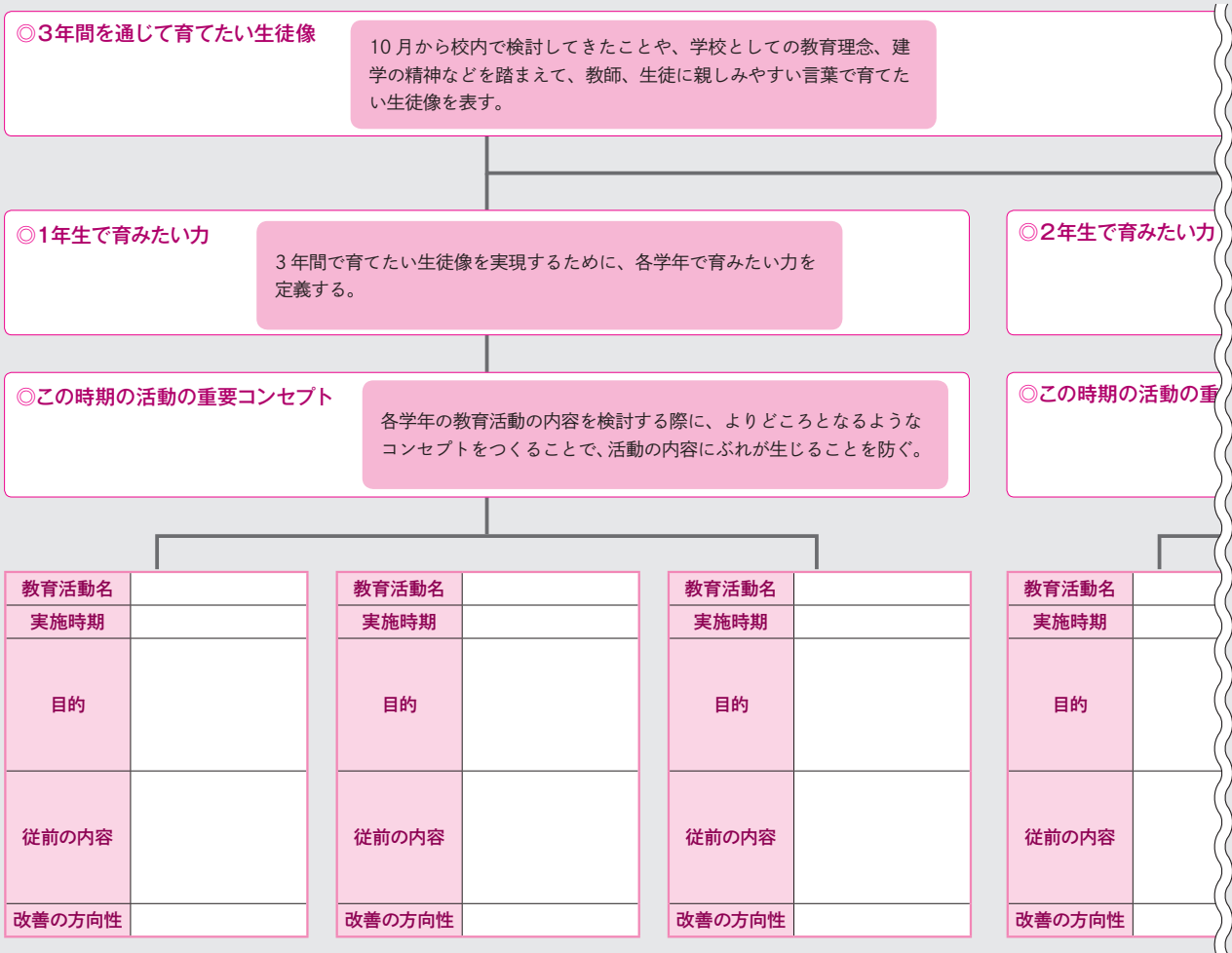
10月

学習の意義・
目的の明確化

「育てたい生徒像」を小グループで話し合うことで、探究学習・A Lの土台作りを行いました。

探究学習・A L開発のフロー

校内での検討を次のような流れで進める同校。議論の活性化のためにどのような配慮がなされているのかを、サポートスタッフとして参加するベネッセ高校営業部・若榮^{わかえ}寿^{すけ}美^みが解説する。



3年間の行事の内容を4、5人のグループに分かれて確認した後、それぞれのグループの検討結果を整理、統合していく作業を行った(左写真)。そして、最終的に上記のような表を使ってまとめ、校内に共有。今後は、それぞれの行事を探究学習・ALの視点で具体的にどのように改善するのか、さらに、教科学習との連携をどのように図っていくのかについて検討することになる。

今後の予定

2月

探究学習・ALの
カリキュラム決定と
その実施のための
ToDoの整理

1月

教科学習との連携を含む
カリキュラム案の
作成・検討

今回取り組んだ内容

12月

学習の
コンセプトの具体化
(どの行事で
どのような探究学習・
ALを行うのか)

各行事の内容、ねらいの確認は、4、5人の小グループに分かれて行いました。同じ行事でも、そのポイントについて語る言葉はグループによって少しずつ異なります。その差異に目を向けることで、それぞれの行事が今後どのように発展すべきかを、より多角的に考えることができました。この工程を入念に行い、教科学習との連携については、1月に検討することになりました。

ハートを
こがせ!

Vol.12

山梨県立ひばりが丘高校
うどん部

うどんを打って、
売って、
おいしさを伝えたい

準備は大変でも、
お客様の笑顔が何よりの力!

「コシが強く、太いねじれ麺は噛むほどに味が出ますし、みそとしょうゆを合わせたつゆは絶品です。定番の具はキャベツで、馬肉もよく使われます」と、吉田のうどんのおいしさを熱烈にアピールしてくれた部長の天野さくらさん。山梨県立ひばりが丘高校うどん部の目標は、「吉田のうどんを県内外に広め、知名度で讃岐うどんに勝つこと」だ。

現在部員は5人。年1回発行のフリーペーパーの製作、オリジナル商品の開発、イベントでのうどん販売など、多彩な活動を展開しているが、吉田のうどんの知名度は讃岐うどんにまだまだ及ばない。そこで、2015年度に始めたのが、うどん部による手打ち体験会の参加者を「プチ観光大使」に任命する制度だ。部員が先生となつてうどんの作り方を教え、そのおいしさを実感してもら

い、一緒に情報発信する人材になってもらおうというわけだ。幼稚園や祭り、海外からの留学生との地域交流イベントなどで行った体験会で、既に300人以上を任命している。

手打ち体験会やイベントへの出店は具やつゆの仕込みなどが大変だが、志村瑠奈さんは多くの人たちと触れ合うのが何より楽しいと語る。

「みんなが笑顔で『おいしい』と言って食べてくれる姿にやりがいを感じます。学校外の人と話すことが多いので、人前で話すことへの苦手意識がなくなりました」

1年生の今野翼さんが、入部してまず先輩から教わったのがうどんの打ち方だ。「麺が細い」「水が多すぎる」など、何度も指摘を受けながら、コシの強い麺の加減を習得した。打ち方の技を自分のものにしようと、疑問に思ったことは何でも先輩に聞いたと、今野さんは言う。

「麺作りの道具を購入して、家でも日々練習しま

教師の
思い

授業だけでは学べない
ことを、実社会で体験し、
生徒は大きく成長する



山梨県立ひばりが丘高校
大久保健

おおくぼ・けん
教職歴20年。同校に赴任して11年目。
教務部。

励ましの言葉だけでなく、
時には理不尽な経験も

うどん部の活動は、情報経理科の授業の一環として2010年に始まりました。課題研究でのホームページ製作において、地元の名物である吉田のうどんのお店を紹介するというテーマであれば、生徒の学習意欲が高まると考えたのです。少しずつ、一般の人にも利用してもらえるホームページに成長し、活動の幅が広がっていきました。活動はすべて生徒が行っています。外部との窓口は教師が担当しますが、依頼を受けるかどうかは生徒が決め、引き受けた方にはどんなに大変でも最後までやり遂げています。そうした実績が認められ、15年度に正式な部活動となりました。テレビや新聞でうどん部の活動が取り上げられたこ



埼玉県にある西武プリンスドームで野球の試合に合わせて開かれた「山梨県富士吉田市スペシャルデー」では、市から依頼を受けて、野球観戦に訪れた人たちに、キッチンカーで調理した吉田のうどんを販売。自分たちが制作したフリーペーパー「うどんなび」も配布するなど、吉田のうどんのPRに努めた。

した。その苦労があったからこそ、手打ち体験会でもうまく教えられるようになったと思います」
フリーペーパーでは市外の店も紹介。5号では都留市や大月市など、17年3月発行予定の6号では甲府市まで範囲を広げると、坂田実久さんは言う。
「市外でも吉田のうどんが食べられることを広めようと取り上げました。インターネットで取材候補を探し、店を訪れて食べて、誌面で紹介したいと思った店はその場で掲載を交渉しました」

地域からの期待と応援に応えていきたい

目下の課題は新入部員の確保だ。17年3月に3・4年生の3人が卒業し、部員が2人になる。1日にイベントを3か所もかけ持ちしたことがあるほど忙しい部活動だけに、吉田のうどんへの情熱を持つ

て続けてくれる新入部員の入部を期待している。

「うどん部の活動は今や県外にも広がりがつづあります。学校外の人とたくさん知り合いになり、自分を成長させられる部活動なので、ぜひ続けてほしいと思います」（天野さん）

「イベントの依頼が増えたり、取材した店主から声をかけてもらったり、地域の人たちがうどん部の活動に期待し、応援してくれているのを感じています。部員が少ないからといって依頼を断りたくありません。先輩たち以上の活動ができるよう、頑張っていきたいです」（中野さん）

天野さくら あまの・さくら

普通科4年生。部長。「商品開発をしたり、取材を受けたりと、様々な経験ができて、自分が大きく変わった高校生活になった」

坂田実久 さかた・みく

情報経理科4年生。製作を担当したホームページは、コンテストで入賞。「メンバーと力を合わせて作る大変さと楽しさを感じた」

志村瑠奈 しむら・るな

普通科3年生。「うどん部の活動は人々をつなぐ活動だと思う。これからも地域を『つなぐ』存在でありたい」

中野吏希矢 なかの・りきや

普通科2年生。「普通の高校生活ではできない活動ができて、一つひとつの経験が大きな自信になっていく」

今野翼 いんの・つばさ

普通科1年生。将来の夢は自分のうどん店を持つこと。「うどんを食べに行こうと思った時に、真の先に名前が挙がる店にした」

とで、市や企業からの依頼が増えました。また、地元の人から応援の言葉をいただくことは、生徒の大きな自信になっています。初対面のお客様や企業の人と話したり、商品の原価計算をしたりと、活動のすべてが生徒の将来にわたって生きる力になると感じています。時には、礼儀や仕事の進め方の面で厳しい指摘を受けることもありますが、その経験は生徒の日常生活や授業態度にも反映されていきます。

一方で、生徒は社会の理不尽さも経験します。取材の予約を取って店を訪れたのに、相手が不在で、何度か連絡すると「しつこい」と怒鳴られたことがあります。そうした理不尽さは、社会で働くようになれば多くの方が経験することです。うどん部の活動は、授業だけでは学べないことを経験できる重要な場だと感じています。

山梨県立ひばりが丘高校

- 昼間部と夜間部がある2部制の定時制高校。通常4年制のところを、特別授業を設けて、3年間で卒業できる課程も有する。「自主自律」を校訓に掲げ、体験をベースにした学習を重視する「ひばりのドリカムプラン」を展開している。
- 設立 2004（平成16）年
- 形態 定時制（単位制）／普通科（昼間部、夜間部・情報経理科（昼間部）／共学
- 生徒数 約100人
- 2016年度進路実績（現役のみ）
4年制大学は、山梨学院大に1人が合格。短期大学は1人が合格。専門学校進学7人、就職15人。
- URL <http://www.hibarhi.kai.ac.jp>

授業を進化!

思考を深化!

13:15 授業開始



前時に示しておいた論述問題(イギリスが衰退した原因)と、グループごとに選んだ歴史的事象(①アメリカ・ドイツの台頭、②インドの独立、③第二次中東戦争、④その他、⑤イギリスは衰退していない)を確認。「予習して考えが変わったグループは、ほかの歴史的事象に変更してもOK」と伝え、3~4人グループで論述の設計図となる構想メモを作る。

実践 アクティブ・ラーニング

世界史

協働をベースとした論述指導を通して、
自らの言葉で歴史を語り、
世界史の本質に迫る

●普通科の3年生の「世界史B」では、授業の中でグループワークによる論述練習を行う。この日は、「イギリスが衰退した原因」として最も重要と考えられる歴史的事象を選び、その事象に関する説明と、事象がイギリスや世界の歴史に与えた影響について説明せよ」という課題に取り組んだ。(P.25に授業デザインを掲載)



静岡県立にらやま 荏山高校

美那川雄一 みながわ・ゆういち

教職歴13年。

同校に赴任して9年目。研修課長(主任)。

アクティブ・ラーニングの実践は9年目になる。

美那川先生のアクティブ・ラーニング

広く深い視点で物事を捉え、
論述する力を高める

美那川雄一先生は、担当の世界史の授業で、9年前からグループワークをベースとした論述指導を取り入れている。以前は、できる限り多くの知識を教え込むという授業だったが、指導主事の先生から「説明をもっと短くして、生徒に考えさせてはどうか」と指摘を受けたことが、

静岡県立荏山高校

◎校訓「忍」と文武両道の精神の下に、将来の国家・社会を担い、国際社会で活躍する人材の育成を目指す。「生徒の自ら学ぶ意欲に創造的的刺激を与え続ける創造的授業」を標榜し、指導方法や評価方法の改善に取り組む。

◎設立 1873(明治6)年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東北大、東京大、一橋大、京大などに136人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ525人が合格。

◎URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/nirayama-n/home.nsf/IndexFormView?OpenView>



グループワーク中、美那川先生はほとんど全体に指示を出さない。「答えはもちろん、ヒントも示さず、あえて苦しませたい」という考えからだ。机間巡視をして話し合いが停滞しているグループに寄り添い、「〇〇さんはどう思う?」などと、全員での話し合いを促す働きかけに徹する。



予習してきた生徒が多く、すぐに自説を説明し合い、それぞれ構想メモを作り上げていく。同じグループでも、生徒によってキーワードのみを書いたり、表にまとめたり、文章にしたりと、構想メモの形態は様々だ。グループワークは15分間の予定だったが、終わらないグループが多く、5分ほど延長した。

授業を変えるきっかけとなった。

「確かに当時、生徒にひたすら板書をノートに写させるだけの授業では、歴史を真に理解させることはできないのではないかという課題意識を持っていました。そこで、『教師が説明しない授業とは何か』『生徒が考える授業とはどういう授業か』と自問し、生徒が自ら文章を書くことで思考を深めていく授業に転換しました」

授業では、毎回一度は文章を書かせるような発問をする。文字量は異なっても、授業で得た知識を用いて書かせることは、知識を定着させるとともに、広く深い視点から物事を捉えて論述する力を高めることにつながる。さらに、歴史の本質に触れさせたいという思いもある。

「歴史学は、先人が出来事や思想を書き残し、人々に伝えていったことで発展してきました。生徒が自らの言葉で歴史を語ることは、まさに歴史学の本質に触れることだと考えています」

5ステップの指導で 徐々に難易度を高めていく

2年生から履修する「世界史B」の授業で、最初からまとまった分量の論述ができる生徒は少ない。そのため、次の5ステップで段階的に指導している。

①教師の発問に対し、教科書などから文章をそのまま抜き出す。文字資料を読み、世界史の文脈に慣れることをねらいとする。

②教師が指定した歴史用語について、用語集などを参考にして簡潔にまとめる。書き写すのではなく、自分の言葉で書くことを重視する。

③教科書や用語集を参考にして、200〜400字程度の論述をする。書く力の育成と知識の定着をねらいとする。

④既習事項などを基に論述する。教科書などに明確な記述がない問いに対し、自分で考え、論述することを求める。

⑤地図や絵画、統計などを読み取り、論述する。非文字資料を読み取り、言語化することで論述する力を高める。

2年生前半は①を徹底することで書くことに慣れさせ、徐々に難しい活動に移行する。④や⑤のステップに到達するのは、3年生後半になってからだ。

思考の活性化・深化への配慮

生徒同士が考えを高め合つと 教師の想定を超える論述ができる

この日の授業は、論述指導の集大成として、①〜⑤の要素をすべて含む課題を設定した。教科書、用語集、資料集を参考にグループごとに話し合い、最終的に個々で論述を行う。

美那川先生は、論述指導を通じた構想メモの作成を重視している。

「論述の設計図である構想メモの内容によつ



グループ内でお互いの解答を読み合い、独自のルーブリックを基に3段階で評価する。「単に点数をつけるだけではなく、『こうした方が分かりやすい』という点や事実誤認があったら教え合っ」と指示。実際、グループのメンバーから指摘を受けて書き直す生徒の姿が至る所で見られた。



生徒個々に解答の作成を開始。机の並びはグループワークの時のままなので、相談しながら書き進める姿も見られた。先生は、「たくさん書く必要はない。接続詞を上手に使用して分かりやすい文章を書こう」「時系列で書かれていると分かりやすいね」などと、論述のポイントを示した。

て、論述の質はほぼ決まります。必要なポイントを示すとともに、上手に論述できている生徒の構想メモを、クラス全員に共有するなどして指導しています」

生徒が構想メモのポイントを押さえる上で参考にするのが、独自のルーブリックだ。美那川先生は、2・3年次の論述指導において共通方針のルーブリックを提示しており、生徒はその内容が頭の中に入っている。今回のルーブリックでは、「歴史的事象について多角的な視点から具体的に説明している」「統計資料と年表を、歴史的事象に関する知識と結びつけて正確に読み取れている」などの観点を示しており、生徒はそうしたポイントを外さないようにキーワードを整理して構想メモを作成する。

また、生徒の思考を深めるために、グループワークを通して構想メモを作らせるようにしている。この日の授業でも、生徒が考えを高め合う姿が各グループで見られた。例えば、アメリカ・ドイツの台頭からイギリス帝国衰退を説明するグループでは、ある生徒が「アメリカはいち早く重工業に転換したけれど、イギリスは軽工業のままだった」と発言。それを受けて別の生徒は、「その時代の最先端の技術を取り入れた国が繁栄する」、さらに別の生徒は、「今ならIT革命がそうだよ」と述べ、時代を超えた視点から技術革新の意義を捉える論に高めていった。

「1人で考えることには限界があり、教師の

予想以上の答えが出てくることはほとんどありません。しかし、生徒同士が考えを高め合うと、教師の想定をはるかに超える意見が出てくる」とがよくあります」

場づくりへの配慮

ルーブリックに基づいて
確かな観点でメンバーの解答を評価

解答を書き終えたと、グループ内でルーブリックを基に相互評価を行う。それも、生徒が互いの考えを深めていくための工夫だ。

「相互評価の点数は、評定には反映していま



ワークシートの上段は構想メモ、中段は論述、下段は「世界史の問い」の記述スペース。構想メモの段階で十分に話し合い、考えがまとまるため、すらすらと書き進められる生徒が大半だった。次回の授業では、優れた解答をクラスで共有する。

授業デザインシート

【教科・科目】地理歴史・世界史

【設定時数】3時間中の2時間目

【分野・単元】演習（イギリス近現代史）

【本時全体の目標】近代以降のイギリスの歴史を、世界的な視点から考察する

【テーマ・作品】イギリスが「衰退」した原因は何か

学習内容 * GW…グループワーク	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
発問:イギリスが「衰退」した原因を①～⑤から1つ選び、その歴史的事象とイギリスや世界の歴史に与えた影響（歴史的意義）を論述する	生徒は、学習課題となるリード文から、何について論述するよう求められているのか、文脈を正確に読み取る。	・技能	2年次から授業や定期考査、模試でリード文の読み取り方を学習。生徒は、問題文を読み取り、「何について論述すればいいのか」と学習課題を明確に理解するため、問題文に線を引いたり、文章を抜き出して書いたりする。	生徒の思考力・判断力・表現力を育てるため、今回の授業では、生徒が葛藤するような、正解が1つではない学習課題を設定。生徒が知識を活用して、論理的に意見を組み立てる過程に、学びの価値を置いた。	11月実施の実力テストや進研模試の結果から診断的評価を行い、生徒の既存知識を把握しておく。
GW I: ①米国・独国の台頭、②インドの独立、③第二次中東戦争、④その他、⑤「衰退」していないから1つ選択し、考察・判断	生徒は、既習知識を活用し、グループでの対話を通じて、知識を文脈に合わせて構造化（因果関係の構築など）していくことができる。	・知識 ・思考力 ・判断力 ・主体性 ・協働性	グループのメンバーで、歴史用語を用いて対話し、歴史的事象を個別に覚えるだけではなく、「つなぐ」「比べる」ことにより歴史を構造的に理解し、知識として定着させていく。原因を1つに定めていく過程が、生徒の思考や判断を促す。	深い学びを引き起こすような学習課題に対しては、グループで取り組ませるようにしている。グループは、建設的な対話ができるように、世界史の学力だけでなく、生徒の性格や人間関係を考慮して3～4人で編成。	教師は発言を控え、生徒の話し合いが進行しているかどうかだけに注意する。
GW II: 構想メモの作成	選んだ歴史的事象について教科書、用語集、プリントなどで調べる。ルーブリックに基づき、具体的・論理的に記述するための設計図を、グループでの対話を通じて作成。	・知識 ・思考力 ・判断力 ・主体性 ・協働性	論述をする時には、設計図となる構想メモの作成に時間をかけさせている。グループのメンバーと協力して、ルーブリックを参考に「何をどのように書くべきなのか」を検討している時間が、生徒が思考している時間となる。	ルーブリックにより、生徒にどのような論述を求めているのか（どのように歴史的事象について考えてほしいか）を示す。「論述の7割は、構想メモで決まる」と繰り返し生徒に指導している。	世界史が苦手な生徒が多いグループでは教師が一緒に構想メモを作成。「これは何」「なぜ」「どのように」と質問を繰り返して、グループの思考を促す。
論述	構想メモに基づき具体的・論理的に論述。年号を表記したり、「第1に……、第2に……」「Aは～だ。一方、Bは～だ」と接続詞を使ったりして、時系列や因果関係、比較を明確にして論理的に書く。	・表現力	教科書・用語集から「文章を抜き出す」「文章を分かりやすく書き換える」「文章と文章をくっつける」「統計資料や絵画資料の表しているものを文章化する」などの文章表現力を用いて、グループで作成した構想メモに基づき、個人で論述。	発問に対する解答としての論述になっているのかを生徒に喚起する。文と文の論理関係を示す言葉の効果的な使用により、論理的な表現となるように促す。	知識があっても、発問が正確に理解できていないと、自分本位の文章を書くことが多い。机間巡視で、注意すべき生徒には個別に助言を加える。
GW III: 相互評価（解答提出、教師による評価）	生徒は、ルーブリックに基づいて、グループのメンバーの論述を評価する。他者の論述を評価することで、自分の論述と比較できるようになり、自己評価へとつなげる。	・知識 ・思考力 ・判断力 ・多様性	教師が作成したルーブリックを生徒に提示し、評価の観点を示す。生徒は、そのルーブリックに基づいてより詳細な規準・基準をつくり、メンバーの論述を評価する。点数だけでなく、よかった点、改善すべき点を、必ず言葉でメンバーに伝える。	他者の評価により、自己評価できるようになり、受験直前期には、自己評価が重要だと説明。論述は、教師がより詳細なルーブリックに基づき評価。間違いを訂正し、コメントを加えて形成的評価を行う。生徒の理解度を把握し、教師の授業評価にもつなげる。	生徒がつけた評価点数よりも、相互評価後に訂正したり、加筆したりした部分に注目し、形成的評価が効果的に行われたかを重視する。
まとめ	生徒は、ほかのグループや生徒の論述を読み、歴史的思考力の幅を広げる。	・多様性	教師は、提出された解答の中から模範的なものを選び、コメントなどを書き加えてプリントにして次の授業で配布。	イギリスの衰退と歴史的事象を論理的に結びつけて説明。「イギリスの衰退は、イギリスだけを見て分らず、イギリスと世界との関連の中で考察し、解答は導き出せない」	知識の正誤だけにとらわれることなく、世界史の求める思考力、「広い視野」を身につけることの重要性について説明する。
GW IV: 発問（本質的な問い）：国家が衰退するとはどういうことかを論述する	生徒は、世界史における「本質的な問い」について思考することで、探究心を引き起こし、自らの課題を創出するようになる。	・思考力 ・主体性 (課題創出力)	「本質的な問い」を繰り返し問うことで、生徒は学びを一時的な知識とせず、自ら新しい学習課題を創出し、思考を続けていく。その姿勢は、内容理解の促進と関連づけを起こし、観念の転移も促す。	答えが1つでない、生徒が葛藤を引き起こすような発問を、世界史における「本質的な問い」として提示。オープンエンドで終わることで、生徒に課題を抱き続ける時間を生み出す。	自分の言葉で「本質的な問い」に答えようとしていたり、新たな課題を創出したりする解答が見られれば、評価。

*美那川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

せん。あくまでも確かな観点から相手の論述内容を理解し、それに対して意見を述べるために活用します。友人から指摘を受けて自分の考えを変えることには勇気が要りますが、そのような柔軟性を身につけておくことは、生徒が社会に出ていく上で欠かせないと考えています」

グループワークを活性化するために、グループ編成についても試行錯誤を続けてきた。

「生徒は多感な年頃故に、グループワークはどうしても人間関係の影響を受けます。そのため、生徒から関係性をヒアリングしたり、個々の性格や学習に対する姿勢を考慮したりしてメンバーを構成しています」

美那川先生は、論述の発展的テーマとして、毎回「世界史の問い」を設けている。今回は「国家が『衰退』するとは、どういうことか？」と問いかけており、次の授業で生徒に論述させる計画だ。これまでも、例えば、世界大戦にかかわる論述の後に、「どうして戦争は起こるのか？」といった問いを設定してきた。

『「世界史の問い」は答えがない問いであり、歴史の本質に迫るものです。大学入試に直接つながるテーマではありませんが、そうした問いを探究させることで、世の中の事象を空間的、時間的に広く捉える視点を育てたいと思っています。世界史を通して育つそうした力が他教科と相互補完的に高まり合い、これからの時代に必要なコンピテンシーがつくと考えています」



大阪府・私立
香ヶ丘リベルテ高校

進学指導

生徒目線の指導を徹底し、 表現教育科新設4年目で 公立大学合格者が誕生

◎堺愛泉女学校として設立。1991年に堺女子高校に、2012年に現校名に改称。美容芸術・ファッションビジネスなどの6コースある普通科と、表現科目を中心としたカリキュラムの表現教育科の2学科制。進学指導に力を入れるとともに、資格取得も見据えた専門性の高い教育を実践している。

設立
1922(大正11)年
形態
全日制／普通科・表現教育科／女子
生徒数
1学年約320人
2016年度入試合格実績(現浪計)
公立大は、大阪府立大に1人が合格。私立大は、日本体育大、法政大、京都産業大、同志社大、大阪大谷大、大阪芸術大、関西大、近畿大、桃山学院大、甲南女子大、兵庫医療大など、その他併設堺女子短大に進学。
住所
〒590-0012 大阪府堺市堺区浅香山町1-2-20
電話
072-238-7881
Web Site
http://www.liberte.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎表現力ある女性を育成する「表現教育科」を設置し、国公立大学・難関私立大学の合格を目指す

STEP 1

実践

◎生徒指導の充実とともに、模試やオープンキャンパスの活用による進学意識向上、補習やICTの活用による学力向上を図る

STEP 2

成果

◎2016年、表現教育科新設4年目で初めての公立大学合格者が誕生。生徒の服装やマナーも大きく改善した

STEP 3

表現力ある女性の育成と
進路改革

2016年は、大阪府にある香ヶ丘リベルテ高校の95年の歴史において、大きな一歩を踏み出す年になった。表現教育科新設4年目で初の公立大学合格者が誕生したのである。生徒から電話で合格の報告を受けた進路指導チームの堀岡亮平先生は、その時の様子を次のように語る。

「朝から緊張感で張り詰めていた職員室の雰囲気は、生徒の電話で明るい雰囲気に一変しました。表現教育科の設置以降、失敗できないという責任と重圧を感じ続けていただけに、『合格』と聞いて、安心して力が抜けてしまうようでした。何よりも、生徒が最後まで目標に向かって頑張ってくれたことがうれしかったです」

同校が、多様な希望進路を持つ生徒のために、美容や保育、音楽などのコース制としたのは15年前のことだった。そして、12年度、新たな改革として文部科学省からも求められている、表現力あるグローバルな女性の育成に向けて、表現教育科を新設した。同科は、普通科のアクティブアートコースをより発展させ、声優・演技・ダンス・楽器などの身体表現だけでなく、スピーチ・ディベート・プレゼンテーションといった言語表現も取り入れ、コミュニケーション力を向上させることを目標とした。進路において

は、国立公立大学・難関私立大学にも進学できる
学科として構想した。

表現教育科設置の背景には、09年の堺リベラル
中学校の設置があったと、菅野輝史教頭は語る。

「堺リベラル中学校でも表現教育を重視し
ており、高校でさらにその学びを深めたいと
願う生徒の受け皿にしたいという思いがあり
ました。好きなことを極めたい、夢を追い続け
たい生徒はもちろん、表現力を高めつつ大学
進学という目標を掲げる生徒にとっても、自
己実現を図れる学科にしたいと考えました」



香ヶ丘リベルテ高校 表現教育科教頭
菅野輝史 すがの・あきひと

教職歴22年。同校に赴任して22年目。「モットー
は『心を出せ』(心の中にある思いを出す。出会っ
た生徒は一生つき合っつもりで指導する)」



香ヶ丘リベルテ高校
神野孝裕 じんのか・たかひろ

教職歴12年。同校に赴任して12年目。普通科1
学年担任。「モットーは『熱風がむしゃら』」



香ヶ丘リベルテ高校
堀岡亮平 ほりおか・りょうへい

教職歴11年。同校に赴任して5年目。表現教育
科チーフ、進路指導チーフ。「あらゆる事象を生
徒の学習につなげる」



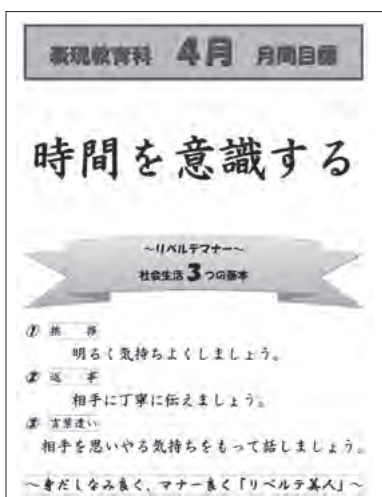
香ヶ丘リベルテ高校
阪上宏樹 さかうえ・ひろき

教職歴5年。同校に赴任して4年目。表現教育
科教務チーフ。「周囲の人は自分の鏡。いつもブ
ラスの言葉で生徒と接する」

進学重視への転換は、同校にとって大きな挑
戦だった。それまで同校の大学・短大進学者は
指定校推薦入試の利用と併設校の短期大学への
進学が中心だった。また、表現教育科は専門学
科として教育課程を編成しており、その中で生
徒の志望を育み、さらに大学合格に必要な学力
をつけさせなければならぬ。このような背景
から、大きな改革の幕が開けた。

「ビジョナリーワード」で 理想の生徒像を示す

まず着手したのが、学習に向かう土台となる
生徒指導の強化だ。身だしなみやマナーを意識
した指導基準を教師間で共有し、生徒・保護者



「リベルテマナー」とともに、「月間
目標」として、教師が生徒に「して
ほしい」「なっ
てほしい」目標を考
え、掲示物にして
校内に貼り出して
いる。生徒と一緒
に教師も目標に向
かうという取り組
みだ。
*学校資料をその
まま掲載

に周知した。それまでの同校の校風から、予想
外の厳しさに反発する生徒も少なくなかった
が、教師は厳格さだけで生徒と接することはな
かった。生徒が理想とするような「ビジョナリ
ワード」を示して、主体的な変容を促したのだ。

「あれも駄目、これも駄目という否定的な
指導だけでは、生徒の反発を生むと思いま
した。『こんなリベルテ生だったら素敵だよ』
という理想の姿を示す方が、生徒も行動しや
すいと考え、生徒がイメージしやすく、手を
伸ばせば届きそうな言葉を、教師全員で検討
しました」(菅野教頭)

具体的には、社会生活の3つの基本として接
拶・返事・言葉遣いを「リベルテマナー」(図)
として掲げ、それを実践する生徒を「リベルテ
美人」と呼ぶようにした。毎年9月の学園祭で
は、生徒と教師の投票により「ミス・リベルテ」
を選び、表彰する。各クラスの代表者は、イン
タビューやクイズなどで「リベルテマナー」の
理解度や実践度を判定される。学校を挙げての
イベントにすることで生徒の意識に浸透させ、
マナーのよい生徒がたたえられる学校文化を醸
成している。

模試の結果が芳しくなくても 折れない心を育てる

次に注力したのが、進路意識の向上だ。表現

教育科1期生の半数以上は、入学当初、「どこかの大学に進学できればよい」と安易に進路を考えており、いかに生徒の進路意識を高め、それに見合う学力をつけさせるかは大きな課題だった。

入学時から生徒や保護者には、「頑張れば国立大学進学も夢ではない」と繰り返し伝え、進学意識の向上を図った。夏休み前には進路講演会を行い、大学進学のリットなどを説明したり、大学のオープンキャンパスへの参加を促したりした。

生徒に大学進学を意識させるために、ベネッセの進研模試も導入した(現在は進路マップ(※1)を導入)。1期生の1年次は、教師が生徒の学力に応じて個別に受験する模試を選んでいったが、2年次以降は年5回の模試を年間計画に組み込んだ。模試の結果は、担任が面談などで生徒一人ひとりに返却し、結果分析の内容や今後対策すべきことなどを伝えた。

「模試で芳しくない結果が出る度に自信を失い、大学進学を諦めそうになる生徒もいました。そこで、模試の結果に一喜一憂しないよう、日頃から『今は合格可能性が高くないても大丈夫』と伝え、模試の結果を見ながら『この判定を1つ上げる力は十分にあるよ』などと励まし、生徒が常に前を向けるような声かけをしました」(堀岡先生)

オープンキャンパスで 大学への憧れを喚起する

大学のオープンキャンパスも積極的に活用した。生徒から希望者を募り、教師が引率して、大阪大学や関西大学などの難関大学、生徒に人気のある外国語系や芸術系の大学のイベントに参加した。

漫然とした見学に終わらないよう、工夫もした。例えば、学力の高い生徒には大阪大学の公開講座の受講を勧めたり、海外に興味がある生徒にはキャンパスで外国人と学生が語り合う様子を見せたりした。

「生徒によつては、キャンパスを回るルートまで示して、細かくスケジュールを組みました。それを機に、大学に憧れを抱き、進学を希望するようになった生徒も多くなりました。そのような高みを目指す生徒の姿勢が、クラス全体により刺激をもたらしてくれました」(堀岡先生)

教科指導でも、新しい取り組みを次々と導入した。放課後7〜9限目に実施する「勉強塾」は、難関大学を目指す生徒を対象とした特別補習で、1期生の2年次から開始。学力・志望に合わせて、ほぼ個別指導の形で受験科目の補習を実施した。3年次には予備校の講師を招いて、個別の志望に応じた対策講座も実施した。

夏季休業中には、2週間の「夏期学習セミナー」

を行った。今までは補充学習が中心だったが、表現教育科ではそれに加えて、大学志望者向けの講座も用意した。実施教科・科目は、国語、日本史、世界史、数学、化学、生物、英語、小論文で、1コマ90分。2年次からは中級と上級クラスに分けて実施し、成績上位層の生徒には自分の必要に応じた教科・科目を選択させ、成績下位層の生徒には中級クラスに必須で参加させた。

ICTで練習問題を配信し、 学習習慣の定着を促す

ICTの活用で指導効率を高めている点も、同校の変化の1つだ。その牽引役は、16年度に導入した「Classi」(※2)だ。2学期には、問題配信機能を利用して、定期考査や進路マップの「基礎力診断テスト」の前に、全生徒に練習問題の配信を始めた。生徒は各自、スマートフォンやタブレット端末、パソコンで問題を見ながら取り組む。そして、テストの後には振り返りの問題を配信し、復習を促す。教務チームの阪上宏樹先生はねらいをこう語る。

「本校の生徒に家庭学習習慣をより定着させるために、机に向かう時間が少しでも増えてほしいと考えています。さらに、テストの事前・事後の学習も大切であるという意識を浸透させるために、練習問題の配信を始めま

*1 生徒の「なりたい自分さがし」と「なりたい自分づくり」をサポートする教材(適性検査、学力検査などがある)。
*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

した」

表現教育科では、国語・数学・英語の課題を終礼時に提示し、翌朝の5分間で小テストを実施していた。それに代わる学習習慣定着の方策として、計画的に問題配信を始めた。

「『Classi』の問題配信機能を使えば、問題の選択肢が増えるとともに、生徒も自分の好きな時間・場所で問題に取り組みます。さらに、自動で採点もしてくれるので、結果の集計も容易になりました。その機能を授業でどのように展開させていくのかを、今後考えていきたいと思っています」（阪上先生）

普通科でも、1年生全員に定期考査の練習問題を配信し、本番では配信した中から同じ問題を必ず1問入れるようにして、事前学習への意欲を高めているという。普通科担任の神野孝裕先生はこう語る。

「『Classi』導入後、生徒からの質問が増えました。解答はネット上でできますが、ネットワークの中だけにとどまらず、学校生活の場でも対策問題への質問や感想が寄せられています。ICTを使うことで、生徒との直接的なコミュニケーションも増えた実感しています。また、通学中に『Classi』を使って勉強する生徒も増えており、隙間の時間を上手に活用する力がついてきたのも大きな変化です」

普通科では、学校を欠席した生徒に

「Classi」を使った学習支援を行うほか、体育祭・学園祭の様子を動画で配信し、自宅にいても学校生活の雰囲気を感じられるようにしている。

今後は、「Classi」の活用を前提とした学習計画を学校全体で立案し、学習習慣の定着を強化していく考えだ。

安定した進学実績を上げる 指導システムの確立が課題

表現教育科の設置以来、学校の雰囲気は大きく変わり、放課後、学校に残って学習する生徒の姿も見られるようになった。また、自分から元気に挨拶する生徒が増え、身だしなみや職員

室への入退室のマナーも格段に向上した。教師も、ICTを積極的に活用しようとするなど、より能動的になった。

今後の課題は、継続して高い進学実績を上げていくことだ。

「生徒が胸を張って希望進路を選択し、それを実現していける学び舎であるとともに、母校に誇りを持ち、卒業後もいつでも帰って来られる学校であり続けたい。そして、卒業生が母校で教壇に立てたら最高です。これからも生徒のために何ができるのかを考えながら、さらに教育の質を高めていきたいと思っています」（菅野教頭）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

英語で世界が広がることを 生徒に伝えていきたい

表現教育科教務チーフ 阪上宏樹

外国語系の大学を卒業後、民間企業の営業職を3年間経験しました。その後、退職して、国際貢献という大学時代からの夢を実現するため、青年海外協力隊として2年間、ケニアの男子の更正学校でボランティア活動を行いました。教育やスポーツを通じて少年たちと触れ合う中で、人を育てる大切さを知るとともに、私自身の経験を日本の子どもたちに伝えたいと考えようになり、英語の教員免許を生かして本校に赴任しました。

授業では、自身の経験を踏まえて、英語が使えることでどれだけ世界が広がるのかを、折に触れて話しています。最近、「英語が好きになった」「外国語大学を目指したい」という生徒も少しずつ増え、うれしく思っています。

赴任当初は、「なぜこんなルールも守れないのか」と思うこともありましたが、しかし、「リベルテマナー」が始まった頃から私の意識も変わり始め、できないことを叱るのではなく、その生徒のよいところを見て、「この力をもっと伸ばしていこう」と励ます指導に変わっていきました。

表現教育科の立ち上げ、そして発展とともに、私自身も成長できた5年間でした。教科指導、学級運営と学ぶべきことはたくさんありますが、地道に研鑽を積み、生徒の希望進路の実現を支援していきたいと思えます。



広島県立
やすふろいち
安古市高校

進路指導改革

組織的な進路指導で 生徒の志望を高め、 主体的な学びに導く

◎校訓は「仰高（心豊かな人生の創造を目指し高遠の理想を仰ぐ）。広島県から様々な事業指定を受けてきており、2000年度「学力向上重点校」、03年度「進学指導拠点校」、09年度「トップリーダーハイスクール」、15年度「探究コアスクール」に指定される。

設立	1975(昭和50)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
2016年度入試合格実績(現浪計)	<p>国公立大は、北海道大、東北大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、広島大、九州大、県立広島大などに261人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ531人が合格。</p>
住所	〒731-0152 広島県広島市安佐南区毘沙門台3-3-1
電話	082-879-4511
Web Site	http://www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎公立高校の学区が全県一区となり、成績上位層の生徒が他地域に流出。組織的な進路指導の構築が課題に

STEP 1

実践

◎志望校検討会の充実、難関大学志望者補習の実施、生徒の主体性をより重視した「総合的な学習の時間」への変革を推進

STEP 2

成果

◎組織的な進路指導の体制が整い、国公立大学合格実績がV字回復を果たした。2016年度入試は、過去最高に近い261人の合格者数を記録

STEP 3

進学実績回復に向け、
組織的な進路指導体制を構築

広島市北西部に位置する広島県立安古市高校は、例年200人以上の生徒が国公立大学に合格する、県を代表する進学校だ。しかし、かつては進学実績が低迷していた時期もあった。広島県では2006年度に公立高校の学区が撤廃され、同校の学区の成績上位層から広島市中心部の進学校を目指す者が現れ始めた。その影響もあり、国公立大学進学者数は徐々に減り、数年後には150人程度まで落ち込んだ。進路指導主事の濱井洋行先生は当時をこう振り返る。

「教師たちにも危機感がありました。伝統的に自主性を重んじる校風もあり、学校を挙げて改革に着手する機運はなかなか盛り上がりませんでした。また、進路指導や添削指導は、教師個々に任されている状況でした」
そうした中、09年度に県の「トップリーダーハイスクール」指定校になったこともあり、当時の奥田孝憲校長が「指定校にふさわしい教育と実績を目指すべき」と力説し、10年度に改革が始まった。

まず取り組んだのは、3年生における志望校検討のプロセスの見直しだ。学年団と進路指導部が連携して進路指導を行うこととし、進路検討会議の充実を図った。3年生は5・7・10・12・1月の5回（現在は3回）、全担任と教科

担任、進路指導部、管理職が集まり、生徒・保護者に提案する志望校群や教科学習のアドバイスの方向性を決める。そして、担任は、進路検討会議の情報に基づき、個別面談や三者面談に臨む。

「ここ数年、難関大学も視野に入れた進路指導のできる教師の育成が課題となつています。志望校検討のプロセス、模試データの使い方など、進路情報や分析スキルを共有し、学校全体の指導力向上を図っています」(濱井先生)



前田節子 まえだ・せつこ
 広島県立安古市高校
 教職歴29年。同校に赴任して6年目。主幹教諭。「日々生徒と誠実に向き合い、勇気ある挑戦を支援する」



濱井洋行 はまい・ひろゆき
 広島県立安古市高校
 教職歴29年。同校に赴任して12年目。進路指導主事。「生物の教員として、生命の大切さと神秘を生徒に伝えたい」



渡辺和恵 わたなべ・かずえ
 広島県立安古市高校
 教職歴31年。同校に赴任して4年目。進路指導部1学年主任。「謙虚な挑戦者として、生徒とともに成長し続ける」



平野洋造 ひらの・ゆうぞう
 広島県立安古市高校
 教職歴15年。同校に赴任して3年目。企画研修部。実践推進リーダー。「既成の概念にとらわれず、生徒のためにやることにチャレンジする」

ハイレベルな指導にも対応できる 実力を備えた教師集団を目指す

14年度には、主幹、進路指導主事、学年主任、各教科担当による「難関大学指導プロジェクト」を発足した。目的は、難関大学に合格できる受験学力だけでなく、学問・研究に対応する資質・能力を持つ生徒の育成を目指し、難関大学指導体制を確立することだ。難関大学も視野に入れたハイレベルな指導にも対応できる教師集団となれば、学問・研究につながる授業や指導が可能となり、その結果、生徒一人ひとりが、高みを目指して自分の力を伸ばそうと志を抱くことができる。そうした理念が根底にある。

それまでも様々な取り組みをしていたものの、学年間、担任と教科間、教科内などにおいて、系統的・体系的なものとして十分に機能していなかった。そこで、指導の道筋を「見える化」して「共有」するために、3年間を見通した「難関大学指導トータルプラン」(図)を作成した。具体的な取り組みは、他学年も含めた全教師による進路検討会議の実施、最難関大学志望者対象の個別指導担当者会議の実施、大学入試問題研究の充実などである。例えば、難関大学志望者を対象に、7月(または10月)と1月には、全教師で進路検討会議を行う。難関大学志望の5人程度を取り上げ、個別学力検査までの伸びを推測し、必要な指導について話し合う。それ

らを通して、生徒一人ひとりの、学問・研究に向かう力を伸ばすために、学校として、教科として、授業者として何をしていくのかを共有する。

また、生徒の進路意識の涵養にも力を入れる。同校の生徒は、入学時はほぼ全員が地元大学の志望しているが、県外の難関国立大学へも自分の希望進路と結びつけるよう指導している。1年生から、自身のGTZ(*1)から2ランク上の大学を志望校に設定させるのもそのためだ。さらに補習では、1年生から東京大学や京都大学の過去問題にも取り組ませる。主幹教諭の前田節子先生はこう語る。

図 「難関大学指導トータルプラン」(抜粋)

時期	指導とポイント	内容	教科	
1年生	4~5月		指導の経過観察	
	7~8月		情報提供	
	9月		進路検討会議	
	10月	難関大への適性判定①	・教科担当による難関大対応能力を有する生徒の発掘	難関補習スタート
	12月	保護者への情報提供	・難関大に関する情報提供 ・難関補習の経過説明	指導の経過観察
	1~2月		・難関大補習生徒への意識づけ	
2年	3月	難関大への適性判定②	・指導の経緯と本人・保護者の考え方の把握 ・2年生担任への申し送り	情報提供
	4月	難関大候補生徒の現状共通理解	・難関大候補生徒に関する情報提供	情報提供

指導とポイント、内容、教科、学年会、担任(進路指導)、留意点、行事予定(模試、懇談等)の項目別で、各時期の活動を示した。*学校資料を基に編集部で作成

*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」~「D3」の15段階がある。

「東京大学や京都大学の問題でも、毎日の授業をしっかり受けていれば解けることを実感させています。授業の大切さを認識させるとともに、そうした問題にひるまずやり抜くことが、自分にも手が届くかもしれないという自信につながっています。指導する教師も問題研究に真剣に取り組み、学問・研究に対応する授業づくりの一助となっています」

生徒の努力を「教科面談」で学力向上につなげる

生徒が安易に志望を下げないよう、学習成果がなかなか表れない生徒を対象とした「教科面談」も行う。1・2年生でそれぞれ年1回、ベネッセの「スタディーサポート」の結果を基に、家庭学習習慣は身につけているが成績が伸びていない生徒を各教科20人程度選び、教科担当が面談。その相談内容、教師からのアドバイス、今後の抱負をまとめた内容を基に、担任とも面談を行う。1学年主任の渡辺和恵先生はこう語る。

「『定期考査の成績が上がった』『行き詰まりが打開できて学習に集中できるようになった』など、『教科面談』を機に学力を伸ばした生徒は少なくありません。今後は、一定の期間を空けて再度面談をして、生徒の学習がどう変容したのかを追跡したいと考えています」

教科担当が、生徒の予想外のつまずきに気づ

けることも、「教科面談」のメリットだ。英語科担当の平野洋造先生は次のように語る。

「一文を丸暗記して、文章構造を考えずに音読していた生徒や、リスニングをしても聴きっぱなしで復習しない生徒など、学習の目的を理解せずに取り組んでいる生徒が多いことが分かりました。学習の目的や意味をしっかり伝えることの大切さを実感しました」

「仰高ゼミ」で大学進学後に伸びる力を育む

生徒に高い志を持たせ、主体的な学びに向かわせるために、「総合的な学習の時間」で行うのが「仰高ゼミ」だ。同校は15年度から広島県「学びの変革パイロット校」(*2)の「探究コアカスール」に、13年度から「ユネスコスクール」(*3)に指定され、ESD(持続可能な開発のための教育)を率先して実践し、その内容を地域や世界に発信していくことが期待されている。15年度に赴任した船津久美校長の経営方針に基づき、「仰高ゼミ」ではESDの視点を軸に教科学習・進路指導と連携しながら、生徒の主体性をより重視した授業を展開している。

中でも特色ある取り組みは、1年生の「ストーリーディング」だ。これは、自分の考えを他者に伝える説明の仕方や、感動を他者と共有するための表現方法などを学ぶ活動で、国語と

連関させ、文学作品の音読と身体表現を融合したパフォーマンスをグループで作成・発表する。

まず、専門家のパフォーマンスを鑑賞した後、生徒はそれを参考に、詩をどのように読み、身体を動かすのかをグループで相談し、作者の意図、情景など詩の世界を声と身体で表現する。そして、各クラスから選ばれた2グループが学年全体の発表会で披露する。「発表を通じて、人に伝えるとはどういうことかを学んだ」「同じ詩でも、人によって考えたり感じたりする視点が違うことで興味が湧いた」など、表現に関する知識を身につけ、興味・関心を高める生徒が多いという。ほかに、「切り抜き新聞コンクール」(1年生)、「教育はアクティブ・ラーニングを進めるべきか」などのテーマで行うディベート(1・2年生)などといった活動を行う。

「大学合格が最終目標ではなく、社会に出て伸びていく人材を育てるのが私たちの使命です。社会の課題について考え、議論し表現する経験を通して、学力だけではない新たな時代を切り開く力を持たせて大学に送り出したいと考えています」(前田先生)

生徒主体で運営するパネルディスカッション

「仰高ゼミ」の集大成は、3年生で行うパネルディスカッションだ。これは、持続可能な社

*2 2015年度にスタートした広島県教育委員会の拠点事業。主体的な学びを創造するため、授業研究、横断的・総合的な学びについて研究する「探究コアカスール」(6校)、教科の授業研究や体験的な学びを促進する「活用コアカスール」(18校)を指定。

*3 ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校のこと。

会の実現に向けた課題を掘り起こし、背景や原因を調査、考察した上で、その解決を模索する活動だ。個人考察、グループでのディスカッションを経て、クラス単位で課題を設定し、11月に学年全体で発表・ディスカッションを行う。

各クラスを代表するパネリストがクラスターマについてプレゼンテーションした後、事前で作成した「基調提案」を基に3年生の生徒全員で討論する。16年度は「気候変動への対応」国レベルの不等の是正」をテーマとし、司会は生徒が務め、ゲスト識者のOBである弁護士や教育センターの指導主事にはコメンテーターに徹してもらった。

「6年前から取り組んできた活動を、徐々に生徒主体の運営に移行しています。たとえ意見が合わなかったり失敗したりしたことがあっても、生徒が活動を積み上げ、自分たちの手で討議を進めることに意義があると考えています。ディスカッションを通して、自分が将来どう社会とかかわり、どう社会貢献していくのかを一人ひとりが深めてくれたと思います」(渡辺先生)

全教科で、主体的な学びを促す授業づくりを進める

一連の改革の結果、国公立大学合格者数はこの5年間継続して200人を超え、16年度入試

では261人に達した。難関大学志望者も増え、大学卒業後の社会に出てからの自分を見通して進路を考える生徒も目立つようになった。

それを支えるのが、生徒の主体的な学びを促す授業づくりだ。現在、全県で取り組む広島版「学びの変革」アクション・プランに基づき、同校でも全教科の授業で深い学びのあるアクティブ・ラーニングを取り入れようとしている。

16年度秋の公開研究授業でも、国語、英語など4教科が「知識構成型ジグソー法」(*4)を取り入れた授業を行い、生徒の主体的、協働的な学びを目指した。「個人ではあまり説得力のないような浅い理解の解だったが、グループで話し合ったことで様々な意見が得られ、深い

理解をして納得解を書くことができた」「自分の資料をしっかり読み取って班員に伝えたいという責任感を持ってジグソー活動に取り組めた」と生徒の達成感、満足感も高かったという。

また、「仰高ゼミ」の取り組みとリンクさせた教科の授業もあった。様々な学びを結びつけて、活用させていく授業づくりを、今後も学校全体で研究していく。

「本校で学んだことに自信と誇りを持ち、答えのない問いに対して、他者と協働して最善解を考え抜き、持続可能な社会の構築に貢献できる人であってほしいと思います」(前田先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

主体的な学びを 学校全体で実現する

実践推進リーダー 平野洋造

2016年度、私は企画研修部に配属されました。本校は現在、広島版「学びの変革」アクション・プランに基づいて、学校を挙げて授業改善に取り組んでいます。次期学習指導要領に先駆けて、教師が話す講義形式の授業から、生徒の主体的な学びを促すスタイルへと転換を図るのが目的です。各教科への周知や進捗状況の管理を行うのが、企画研修部での私の仕事です。まずは、教科主任会議に参加して、趣旨を説明してきました。夏季休業までに授業を通して生徒に身につけさせたい資質・能力を明文化し、2学期にはアクティブ・ラーニングを取り入れた研究授業を教科横断で行いました。次は、3学期までに、どの単元でどのような力を生徒につけさせるのかを具体化してもらう予定です。

先生方は授業改善に積極的で、校内への浸透はスムーズでした。難しかったのは、私自身が国や県の方針、アクティブ・ラーニングの意義について理解することでした。説明が表面的にならないよう、学習指導要領や専門書を熟読して理解に努めました。

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業については、私自身、担当教科の英語の授業で手応えを感じています。生徒の活動を軸にすることで、生徒の表情が生き生きしてくるのは新たな発見でした。今後も授業力に磨きをかけて、生徒が自分の成長を実感できる授業づくりを進めていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年10月号指導変革の軌跡「群馬県立前橋東高校」など
▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

*4 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上げらせる協同学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

ビフォー
アフター

3年生0学期

出願書類作成用 調査用紙

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、3年生1学期を前に、出願書類作成や3年生の担任に連携するための「出願書類作成用 調査用紙」について検討する。

検討会メンバー



宮崎県立
延岡星雲高校
柳井健二
やない・けんじ

教職歴24年。同校に赴任して8年目。教務主任。英語科。「音楽にはなれないが、スポーツライク係となつて、個々のよさを照らしたい」



埼玉原立
春日部高校
岡本眞一郎
おかもと・しんいちろう

教職歴34年。同校に赴任して3年目。進路指導部。英語科。「教師は生徒につくられる」「失敗は素晴らしいことの始まりかもしれない」



岡山県・私立
岡山中学校・高校
鷺見香織
すみ・かおり

教職歴17年。同校に赴任して12年目。高校3学年主任。国語科。「人に優しく、己に厳しく、勉強はためみなく」

検討

自己の成長を振り返らせることで、
自信を持って3年生を迎えさせたい



柳井 この用紙は、3年生の担任が出願書類を作成する際の参考資料とするため、生徒に書かせています。また、模試の機会も少なく、中



料とすることがあります。その際は、
生徒も少なくありません。

部活動や行事で務めた係など、事実関係の確認がほとんどでしたが、柳井先生の学校のものは、頑張ったことなどを文章で書かせている点が良いと思えました。でも、書けない生徒もいるんですね。



岡本 学年が上がるほど、こうした志望調査や生活調査を受ける機会が増えます。ただし、「事実を確認するための調査」と「生徒の内面に近づくための調査」では、生徒は受け止め方が異なるでしょうから、

何を目的としたものなのかを、明確に伝えることが重要です。

柳井 いろいろな項目を設けすぎてしまったために、生徒は肝心の「これを書くことで自分にどんな成長がもたらされるのか」が分からなくなり、書こうという気持ちが湧きづらくなっているのかもしれない。受験生になることを間近に控えた生徒の気持ちを、盛り上げられるものにしたいです。

岡本 出願書類作成のための事実確認も確かに重要ですが、3年生の担任とのコミュニケーションツールとして、また、大学への志望の度合いを確認する機会としても機能しているということも、生徒に明確に伝えたいですね。3年生の担任に自分のことを分かってもらい、目標を共有した状態で受験生としての4月をスタートできるのは、大きなアドバン

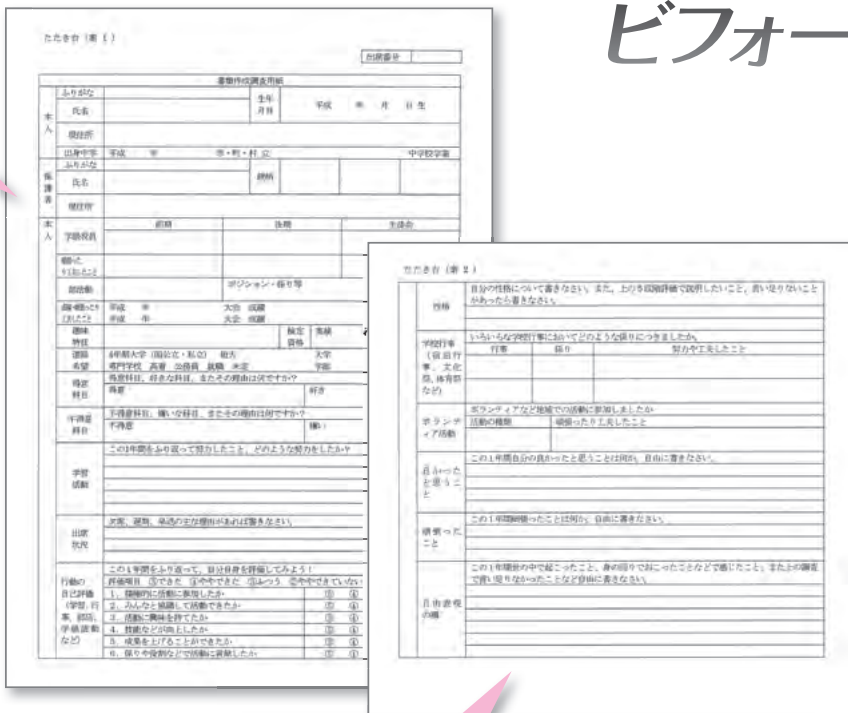
宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二先生 3年生0学期「出願書類作成用 調査用紙」

1枚目は、3年生の担任が出願書類を作成する際に役立つ情報を中心に記入する。ホームルームの時間で記入する場合もあるが、学年やクラスによっては家庭で記入し、提出することもある。

ねらいと機能

出願書類作成に必要な基礎情報を調査

3年生の担任が調査書を始めとする出願書類を作成する際に、基本事項を確認するための調査として、生徒に記入させている。使用する時期は教師によって異なるが、2年生2月～3年生4月が中心だ。また、書かれた内容のどの部分に注目し、声かけするか、それぞれの教師に任せられているのが現状である。



ビフォー

2枚目は、これまで頑張ったことやよかったことを中心に記入する。ただ、記入の見本や観点を提示していないためか、欄がすべて埋まらない生徒もいる。

課題と解決策

- 3 生徒が受験生になるにあたって、自分の長所や得意なこと、目を向けさせ、自信を引き出す内容にする。
- 2 3年生の担任とのコミュニケーションを、より円滑なものにすることを意識する。
- 1 生徒が、何のために書いているのかを意識できるものにする。

テージです。
驚見 3年生にとって一番困難なことは、受験生としての1年間、自分の可能性を信じ、ひたむきに努力を続けることです。3年生になった途端、自信を失いそうになる機会が一気に増えていきますから、**3年生0学期のうち、自分の武器になる長所や得意なことを意識させておきたい**です。
岡本 3年生になる前に、志望大学について何をどの程度理解しているかを、教師が確認しておくことも大切ですね。多忙なこの時期、一人ひとりと面談を行うのは難しいですが、入試科目を知らないなど、明らかに情報不足の生徒には個別に声かけできますから。

学校プロフィール

宮崎県立延岡星雲高校

◎全日制/普通科 フロンティア科/共学 /1学年約200人
 ◎2016年度入試合格実績(現役のみ) / 国立大は、長崎大、熊本大、宮崎大などに23人が合格。私立大は、明治大、立教大、同志社などに延べ118人が合格。

埼玉県立春日部高校

◎全日制・定時制/普通科 男子/1学年約360人
 ◎2016年度入試合格実績(現役のみ) / 国立大は、北海道大、東北大、東京大、京工業大、一橋大などに78人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ381人が合格。

岡山県・私立岡山中学校・高校

◎全日制/普通科/共学/1学年約150人
 ◎2016年度入試合格実績(現浪計) / 国立大は、北海道大、東京工業大、大阪大、岡山大、九州大などに42人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ111人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「出願書類作成用調査用紙」を改良! 次ページで紹介します。

アフター

秘 本人・保護者・担任以外は見ません。

期・出席番号 3年生 組 番 ← 期・出席番号 2年生 組 番
2017年10月1日現在 学年担任 先生

■ 事実の確認

本人	ふりがな		生年 月 日	平成 年 月 日
	氏名			
	現住所	〒		
保護者	ふりがな		職所	
	氏名			
	現住所	〒		

■ 3年生の担任先生への自己紹介① —— これまでの高校生活を振り返って
 自分の好きなこと、得意なこと、楽しかったこと、頑張ってきたことなど、これまでの高校生活について、3年生
 伝えたいことを、次の選択肢1～9から選ぶことで、自由に記入してください。

1. 趣味・特技、熱中していることについて	2. 部活動について	3. 学校行事や校外活動について
4. 学級委員・生徒会活動について	5. 教科の勉強について	6. オンライン活動や地域活動について
7. 友人について	8. 家庭について	9. その他

番号 ()

番号 ()

希望 ()

全体が「事実の確認」「振り返り」「希望進路」の3つで構成されていることが分かるようにした。「振り返り」は「3年生の担任先生への自己紹介」として、まずは自分が高校生活の中で肯定的に捉えていることから書かせて、自信を引き出すようにする。

「希望進路」も、「3年生の担任先生への自己紹介」として書かせる。また、入試科目のチェックやオープンキャンパスへの参加が済んでいない生徒を把握し、個別の声かけへとつなげていく。

秘 本人・保護者・担任以外は見ません。

■ 3年生の担任先生への自己紹介② —— 希望進路や将来の目標について
 今まで考えてきた将来のことについて、3年生の担任の先生に伝えたいことを記入してください。

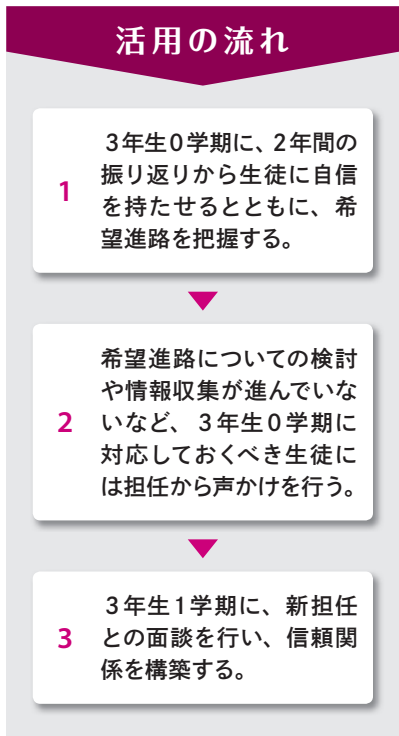
希望進路	4年制大学 / 短大 / 専門学校 / 就職 / その他
学習分野	人文科学 / 社会科学 / 理学 / 工学 / 農学 / 保健 商学 / 家政 / 教育 / 芸術 / その他
学校・学部名	
上記の学校の入試科目・配点のチェック	未 / 済
上記の学校へのオープンキャンパスへの参加	未 / 済

進路希望先
 北海道地方 / 東北地方 / 関東地方 / 中部地方 / 近畿地方 / 中国地方
 四国地方 / 九州地方 / その他

保護者の意向は、本人の希望進路と 同一 / 異なる / 分からない

叶えたい将来の目標や夢について

※その他、3年生の担任先生に伝えておきたいこと
 悩んでいることや不安に思っていること、心配なこと、克服しなければならぬと思っていることなど、3年生の担任の先生に伝えておきたいことを記入してください。



また、「ボランティア活動や校外活動の表彰歴、資格取得などの情報、さらには困った時の相談相手なども書かせたい」などの意見も出された。実際の運用にあたっては、項目は学校や担任によって柔軟に変えていくことが望ましいだろう。

「何を、何のために書くのか」を生徒に伝えるため、調査用紙が「事実の確認」「振り返り」「希望進路」の3つの観点で構成されていることが分かるようにした。「振り返り」「希望進路」を3年生の担任に向けて書かせるのは、進路選択やそれに伴う自己分析に本格的に取り組む時期が来たことを生徒に自覚させるねらいもある。さらに、3年生の担任とのコミュニケーションを促進するため、生徒がそれぞれ書きやすい項目を選べるようにした。そうすることで、記入スペースが埋めやすくなり、3年生の4月を前向きに迎えさせることができるという配慮でもある。

改訂後のねらいと機能
 何を書くのかを
 生徒に分かりやすく示す

ビフォーアフター

活用

3年生の担任に向けて語りやすい
テーマで、肯定的に自己開示させる



柳井 本校では、3年生0学期という言葉は生徒にも定着していま

すが、苦手克服といった学習面での優先事項だけに目が向いていたかもしれません。3年生0学期は、受験生になる前に自分自身を前向きに振り返り、長所や成長を確認することで、受験生としてのやる気を高める時期と位置づけられます。それを学年全体で共有するための指導ツールとして活用したいと思います。



岡本 「3年生の担任への自己紹介」という設定にしたことで、誰に

向けて、何のために書くのが明確になり、生徒も取り組みやすくなるはずです。また3年生の担任も、今まで以上に興味を持って読めるのではないのでしょうか。



驚見 書き手にとって、誰に向けたものなのか、相手はつきりすることは重要ですね。行事の振り

返りなどでも「後輩に向けて書く」と呼びかけると、生徒の真剣さがぐっと増します。

岡本 2年間の高校生活で頑張ってきたこととして何を語りたいかは、生徒によって様々でしょう。特に、推薦・AO入試の志願者が多い高校の場合は、自由に自分の成長を振り返らせた方が、志望理由書での自己アピールの軸が見つけやすくなると思います。今回の改訂版では、書きたい項目を選択式にしていますので、「自分が書けること、書きたいことを書けばよい」と前向きに取り組めるはずで。記入欄の大きさの割合も、生徒に自由に決めさせてもよいかもしれませんね。

柳井 志望理由書や面接で何をアピールするのかは、生徒が自分自身で納得して決めないと、大学にも説得力を持って伝え

られませんか。驚見 長所や得意なことだけでなく、苦手なことや不安といった要素も適度に引き出したいですね。以前、生活調査で生徒に「何が自分の勉強の邪魔になっているか?」と尋ねたところ、生徒はスマートフォン、進路の迷い、家族とのトラブルなどいろいろなることを挙げてきました。日々の生活でうまくいかないことの1つや2つは、誰もが抱えているものです。後ろ向きにならない程度に、自分の弱みに向き合うことができる設問にすることが大切です。3年生の担任も「本人が何を抱え、何を頑張っているのか」を知っておくこと



改良したいのに、
どうすべきか分からない……
指導ツールを募集しています!

◎「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールをより効果的に使用する指導法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

必要事項①~④をご入力の上、
指導ツールを添付して

下記のe-mailアドレスにご送信ください

- ① 学校名・お名前
- ② 分掌・ご教職歴
- ③ ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

で、生徒一人ひとりに合った声かけができるのではないのでしょうか。
柳井 3年生の担任が出願書類作成に取り組み時、心にあるのは「生徒のよいところをきちんと記載して、少しでも合格の可能性が高まるようにしたい」という思いです。だからこそ、生徒に高校生活を振り返らせたり、志望を語らせたりする時も、生徒と教師が一緒に「よいところ」を引き出せる指導ツールを使いたいものです。多忙な中であっても、教師と生徒をつなぎ、生徒の気持ちを前向きにするような指導ツールを、今後も追究していきたいと思

います。

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」の指導ツールの応募時にご提供いただく個人情報は、今後の企画の検討や製作の目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者)上記をご承諾くださる方はご記入ください。

地域社会を牽引する グローバルリーダーの育成を目指す 地方私立大学の改革

(共愛学園前橋国際大学 ● グローバルプロジェクト)

地方の小規模単科大学ながら、文部科学省の複数の支援事業に採択され、各種大学ランキングの上位にも名を連ねる共愛学園前橋国際大学。2012年度から「グローバル人材育成支援事業(GGJ)」、14年度から「地(知)の拠点整備事業(COC)」に採択され、地域社会を牽引する「グローバルリーダー」の育成に力を入れている。地域に根差したグローバル教育を通して、どのような人材を育てようとしているのか。そして、そのために教育の質をどう保証するのか。地方私立大学の未来を先取りする取り組みをレポートする。

地域で働きながら世界ともつながれる人材を育成

地方創生時代にあって注目されているのが「グローバル」だ。地域に根差しながら、地域と世界をつなぎ、海外の活力を地域に取り込み、地域を活性化させていく——そうしたグローバル人材の育成に力を入れているのが、群馬県前橋市の郊外にある共愛学園前橋国際大学である。

同大学は、学生数約1000人の単科大学で、1999年、短期大学を4年制大学に改組し、日本初の国際社会学部を設置して以来、国際的な視野を持ちながら地域の諸課題を解決できる人材を育成してきた。12年度「グローバル人材育成支援事業(GGJ)」、14年度「地(知)の拠点整備事業(COC)」、15年度「大学教育再生加速プログラム(AP)」、さらに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」と、文部科学省の支援事業に採択され、地方創生や学修保証システムの構築など、様々な取り組みを拡充させている。

16年度に最終年度を迎えたGGJでは、育成を目指す人材像に「次世



共愛学園前橋国際大学学長
大森昭生 おおもり・あきお
国際社会学部長、副学長などを経
て、2016年から現職。

代の地域社会を牽引するグローバルリーダー」を掲げ、群馬に本社を置くグローバル企業のサンデンホールディングス株式会社(以下、サンデン)や伊勢崎市教育委員会などと連携して事業を進めている。同大学が地域人材の育成に力を入れる背景には、群馬の地域性が大きいと、大森昭生学長は語る。

「群馬県は、第2次産業の比率が他県に比べて高い、ものづくりの県です。加えて、農業も主要産業の1つであり、いずれもグローバル化が進む中で岐路に立たされています。時代のうねりの中で、これからの群馬を担う人材が、国内のことしか知らず、群馬の中だけで生きていくという考えでは、地域の発展は望めません。群馬に限らず、それぞれの出身地域で暮らし、一生懸命働きながら世界とのつながりを築けるような人

材が、地方にこそ求められているのです」

群馬県は外国人住民比率が全国6位で、児童の1割以上が外国籍という小学校もある。そうした「生活の

学年を超えてチームを組み、様々な課題解決に挑む

同大学では、グローバルリーダーに必要とされる資質を次の3つに定義した。

- ①英語を中心とした外国語によるコミュニケーション能力
 - ②主体性・積極性・チャレンジ精神・協調性・柔軟性・責任感・使命感
 - ③異文化に対する理解と地域人としてのアイデンティティ
- それらの資質を備えた人材を育成するために進めているのが、「Kyoai

グローバル化」は、今後、全国の地方都市で加速すると予測されており、多文化共生の面でもグローバルな体験が必要不可欠だと考え、教育活動を行っている。

「Global Project」だ。課題解決型学習や高度な語学教育を基盤として、世界や地域とのつながりの中で学びを深めていくプログラムだ。

その柱となる取り組みは、どの学生も履修できる「Global Career Training 副専攻」だ。「語学」「理論・スキル」「実践」の3要素から成り、インターネットを使った1対1の英語トレーニング、英語によるディスカッションを通してビジネスやリーダーシップについて学ぶ科目、企業や地域との連携による体験型プログラムなどが設けられている。

そして、それらを支える教育として、主体性や協調性を育むアクティブ・ラーニングを全科目の75%の授業で取り入れ、国際交流を推進するための留学プログラムも多数用

図1 「Global Project Work」の活動例

プログラム	概要
アメリカ研修サポートインターン	伊勢崎市の中学生の海外研修（ミズーリ州立大学・サンデントロイト工場）の引率支援をする。
アジア圏でのミッションコンプリート研修	アジア圏のサンデン現地法人を拠点に、現地において様々なビジネス・ミッションに取り組む。
児童向けグローバル教育ワークショップ	学生、サンデン社員、伊勢崎市教育委員会の協働プロジェクト。伊勢崎市内の小学生が参加するワークショップを企画・運営、コーディネートする。
アジア異文化研修	初めて海外を体験する学生向け。サンデン現地法人訪問、大学生や高校生との交流やボランティア活動を通して異文化を体験。

* 同大学の資料を基に編集部で作成



写真1 2016年度「児童向けグローバル教育ワークショップ」の様子。小学校14校の6年生38人が参加し、外国について学べるゲームやクイズなどを楽しんだ。

地域の子どもたちに夢を与えられた喜び

意されている。さらに、ディスカッションや発表の準備などが行いやすいように設計された校舎「KYOAI COMMONS」もある。

学生が大きな成長を見せるのが、「Global Career Training 副専攻」の中の「Global Project Work」(図1)だ。

例えば、「児童向けグローバル教育ワークショップ」では、夏休みの2日間、伊勢崎市内の小学生を対象に海外を身近に感じてもらうワークショップを開く。企画・運営を担当するのは、希望者で結成されたプロ

ジェクトチームだ。2年生の時に参加した児童教育コース(小学校教員養成課程)3年の中里美穂さんは、当日、子どもに提示するミッション内容の企画を担当した。

「昨年は2年生2人、3年生4人のチームでしたが、2年生だからといって先輩に頼ればよいという気持ちはありませんでした。子どもたちに英語に興味を持ってもらうためにはどうすればいいのか、悩みながら準備を進めました」

15年度は小学校15校から6年生29人が参加し、クイズや海外旅行プランの作成などを行った。楽しそうに活動する子どもたちの姿に大きな達



共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科1年
堀本佳道 ほりもと・よしみち
英語コース所属。群馬県立太田東高校卒業。



共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科3年
中里美穂 なかざと・みほ
児童教育コース所属。群馬県立前橋商業高校卒業。

成感を得た中里さん。後日、参加者の1人が英語に興味を持ち、「将来は英語の先生になりたい」と言ってきたことに喜びを感じたという。

「私がかかわった活動で子どもたちが夢を与えることができたのが、何よりうれしかったです。将来は小学校の先生になり、世界で活躍できる子どもたちを育てたいという思いがより一層強くなりました」(中里さん)

社会人として必要な力を学んだ海外研修

一方、学生に「地獄の研修」と呼ばれる「ミッションコンプリート研修」で徹底的に鍛えられたのが、英語コース4年の堀本佳道さんだ。タイに2週間滞在し、サンデンの現地法人から課されるミッションに取り組み課題解決型研修である。毎朝9時にミッションが発令され、午後3時までグループで解決しなければならぬ。加えて、日本出発前に提示されたファイナルミッションも並行して進める。

毎日のミッションは、「タイ語での自己紹介」に始まり、「現地ブランドの販売戦略」「現地のラーメン店のプ



写真2 2016年3月に行われた「ミッションコンプリート研修」で、ミッション達成のため、観光客にヒアリング調査を行う様子。ミッションのプレッシャーから、自ら話さざるを得ない。

ロモーション」など、徐々にレベルが上がっていく。ファイナルミッションは、「日本の自動販売機をタイで展開するための戦略」だった(写真2)。

「内容的にも時間的にも厳しいミッションだった上に、自分の英語が現地の人に通じず、とにかく大変でした。日本に帰りたいと何度も思いましたが、自分はチームのリーダーで、メンバーの中では一番英語が話せました。自分がやらなければならないという責任感から自分を鼓舞して、ミッションをやり遂げました。最後に、現地企業の社長から『自社で提案してほしい』という言葉をいただいた時は、すべての苦勞が報われた思いでした」(堀本さん)

堀本さんは、「社会人としてどのよ

図2 「共愛12の力」

軸	12の力	力の定義
識見	共生のための知識	多様な存在が共生し続けることができる社会を築いていくために必要な知識
	共生のための態度	多様な存在が共生し続けることを尊重する考えや行動
	グローバル・マインド	地域社会と国際社会のかかわりを捉え、両者をつなぐことで、地域社会の発展に貢献する姿勢
自律する力	自己を理解する力	自己の特徴、強みや弱み、成長を正確に理解する力
	自己を制御する力	ストレスや感情の揺れ動きに対処しながら、学びや課題に持続して取り組む力
	主体性	人からの指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけ、行動する力
コミュニケーション力	伝え合う力	コミュニケーションにおいて、相手の意図を正しく理解し、自分の意図を効果的に伝達する力
	協働する力	ほかのメンバーと協調しながら集団として目標に向けて行動する力
	関係を構築する力	様々な他者と円滑な関係を築く力
問題に対応する力	分析し、思考する力	様々な情報を収集、分析し、論理的に思考して課題を発見する力
	構想し、実行する力	課題に対応するための計画を立て、実行する力
	実践的スキル	現代社会において、必要な基本的スキルと自らの強みとなる実践的スキル

*同大学の資料を基に編集部で作成

うな力が必要なのかも、この研修を通して学ぶことができた」と語る。メンバーそれぞれの強みを生かしてミッションをやり遂げるチームワーク、企画立案のための情報収集能力、的確に表現するプレゼンテーション能力、交渉を円滑に進めるためのコミュニケーション能力やネゴシエーション能力などが、ミッションに取り組み過程で鍛えられていく。

「この研修では、英語コース、国際コース、情報・経営コースなどの学生が混合でチームを組めます。英語

ができなくても、ビジネスや会計の知識など自分の強みを生かしてチームに貢献できるかが重要なのです。グローバルな舞台でも臆することなく、課題解決に向けてそれぞれの力を発揮しながらチーム・ビルディングができるかどうか。地方のグローバル人材に必要なのは、そのような力ではないでしょうか」(大森学長)

身につけた力をeポートフォリオで可視化

学生の成長を可視化するために、

同大学では、卒業時まで身に付けたい力として「共愛12の力」(図2)とルーブリックを設定。学生は年度ごとにそれぞれの力がどのレベルに達しているのかを、コースの担当教員と相談しながら自己評価する。その内容は、eポートフォリオシステム「Kyoai Career Gate」の個人ページに、履修科目や海外・地域での経験、ボランティア、アルバイトなどとともに蓄積され、どの取り組みがどの力を伸ばすことにつながったのかが一目で分かるようになっていた。

「私たちが育てたいのは、自律した学習者です。そのためには、学生が自分の言葉で自分自身の成長を語れなければなりません。『Kyoai Career Gate』では、『この力がついたら海外研修でこういう経験をしたから』というように、プログラムの内容と身につけた力が関連づけて示されるようなシステムになっています。学生が自分の成長を実感できるとともに、自分に足りない力を考えて、履修科目や体験プログラムを選択することも可能になりました」(大森学長)

「Kyoai Career Gate」には、全国に先駆けて、学生が自身の活動履歴

を外部に公開する「ショーケース」(公開履歴書)の機能も備えた。就職活動では、そのURLを企業の採用担当に伝えれば、「Kyoai Career Gate」に蓄積された在学中の活動や成長をアピールできる。また、出身高校に公開すれば、高校側は卒業生の成長や活躍を把握できる。

「自分を成長させる糧」を自らつかみ取る

「本学の教育を高校現場にアピールするだけでなく、大学教育の現状を知ってもらい、高校と大学が互いに刺激し合って教育を変えていきたいと考えています。『ショーケース』は大学と産業界、高校教育との接続で大きな効果を発揮するでしょう」(大森学長)

推進プロジェクトに抜擢された卒業生や、「ミッションコンプリート研修」で課題を解決できなかった悔しさをばねに、帰国後、ビジネスコンテストに参加して大学生部門賞を受賞し、在学中に起業した学生もいる。

もちろん、プログラムに挑戦するかどうかは、学生のやる気次第だ。

「連携する県内の高校の先生から言われた言葉を借りれば、学生には『自分を成長させる糧をつかみ取る力』を身につけてほしいと思っています。

同大学の学生は、45%が海外留学制度を利用し、90%以上がキャンパス内外で展開されるアクティブラーニングを経験する。学生はなぜ様々な活動に挑戦するのか。学生が皆、指摘するのは、周囲からの刺激だ。

「目的意識が高い友人がたくさんいることが大きいと思います。誰々がボランティアをしている、資格試験の準備を始めたといった話を聞くと、自分も負けていられないという気持ちをかき立てられます」(中里さん)

挑戦しました。留学制度や体験型の研修以外にも、大学にはコンテストやボランティア、オープンキャンパス、地域におけるサービ斯拉ーニングなど、学生主体で取り組むプログラムがたくさんあります。意欲のある学生が力を発揮できる場があるところが、自分を大きく成長させてくれるのだと思います」(堀本さん)

高校時代に主体的な学びを経験した学生は、1年次から様々なプログラムに積極的に参加するという。多くの大学が、学生の意欲に応えるためのプログラムを用意している。あとは学生自身がそれをいかに利用できるかだ。高校時代の学びのあり方が、大学でのさらなる成長に大きく関係しているのかもしれない。

「この大学に入って、どのような経験をするかが重要だと思うようになりました。周りに負けたくないという思いが強く、様々なプログラムに

「この大学に入ってから、どのような経験をすることが重要だと思ってきました。誰々がボランティアをしている、資格試験の準備を始めたといった話を聞くと、自分も負けていられないという気持ちをかき立てられます」(中里さん)

「この大学に入って、どのような経験をすることが重要だと思ってきました。誰々がボランティアをしている、資格試験の準備を始めたといった話を聞くと、自分も負けていられないという気持ちをかき立てられます」(中里さん)

「この大学に入ってから、どのような経験をすることが重要だと思ってきました。誰々がボランティアをしている、資格試験の準備を始めたといった話を聞くと、自分も負けていられないという気持ちをかき立てられます」(中里さん)

英語力、思考力、精神力が鍛えられると出場者が実感

埼玉県の公立高校2校が 英語ディベートの国際大会に出場！

埼玉県高等学校英語教育研究会は、生徒が主役となり、英語を意欲的に学習する授業づくりを目指し、様々な挑戦をしている。その1つとして力を入れているのが、英語ディベートの指導だ。今回は、全国大会でも上位入賞の常連校であるさいたま市立浦和高校と埼玉県立浦和高校が、海外で行われた英語ディベートの国際大会に出場した模様をレポートする。

高校から英語ディベートを 始めたメンバーが国際大会に出場

全国高校英語ディベート連盟 (HENDA) が主催する「全国高校生英語ディベート大会」(以下、全国大会。*1)の優勝チームには、主にアジアの国々が出場する英語ディベートの国際大会「Asia World Schools Debating Championships (AWSDC)」(図1)の出場権が与えられる。埼玉県・さいたま市立浦和高校のインタースクールド部は、2015年12月に行われた全国大会で優勝し、16年7月にタイで開催さ

れたAWSDCに出場した。部長の野内瑛里さんは、次のような意気込みを持ってAWSDCに臨んだという。

「本校は、10年度の全国大会で優勝し、スコットランドで開かれた世界大会に出場しました。その時には1勝もできなかったと聞き、先輩の分も勝ちたいと、メンバーで力を合わせて準備を進めていきました」

指導者として2回目の国際大会出場となった顧問の浜野清澄先生は、生徒の入部時から、国際大会出場を見据えて英語力の強化を図ってきた。「部員は学校教育のみで英語を学んできた者が多く、皆、入部してから英語ディベートを始めました。そん

な生徒たちでも、世界で通用する英語を話せるよう、指導してきました」

勝利への壁となっていたのは、ディベート形式の違いだ。全国大会は、大会前に論題が提示される準備型で行われるが、AWSDCでは、試合直前に論題が提示され、その場で立論する即興型が採られている。同部は、国内の即興型ディベート大会でも上位入賞を果たしていたが、準備型を中心に活動しているため、慣れずに苦労したと、嶋村綾さんは振り返る。「私たちのチームには、帰国子女が1人もいません。その場で英語で立論するスピードや、相手の論点をしっかり聞き取るリスニング力に不安を

感じました。さらに、論題には政治、経済、環境などが取り上げられるので、それらの知識や教養を深める必要もありました」

練習として16年3月に出場した即興型ディベートの国内大会では、同じくAWSDCに出場する全国選抜メンバー(本誌16年10月号P.50〜53参照)と対戦し完敗した。危機感を抱いた同部は、即興型ディベートに取り組むOBの大学生から指導を受け、即興型ディベートを学び直した。インタースクールド部に公開されている過去の大会の動画を教材に、相手のスピーチを聞き取って反論を述べる練習を重ね、リスニング力も鍛えていった。

*1 2006年12月に初めて開かれ、16年度で11回を迎えた。詳しくは、全国高校英語ディベート連盟(HENDA)のウェブサイトをご覧ください。<http://henda.global/>



教諭
浜野清澄
はまの・きよすみ
教職歴21年。同校に赴任して15年目。英語科。インターアクト部顧問。

3年生

野内瑛里

あやない・えり
インターアクト部部長。AWSDCではAチームリーダー。

3年生

嶋村綾

しまむら・あや
インターアクト部。AWSDCではAチーム。

3年生

松本紗季

まつもと・さき
インターアクト部。AWSDCではAチーム。

3年生

大澤賢

おおさわ・けん
インターアクト部。AWSDCではBチームリーダー。

3年生

玉村優奈

たまむら・ゆな
インターアクト部。AWSDCではBチーム。

3年生

長江佳乃

ながえ・よしの
インターアクト部。AWSDCではBチーム。

3年生

浅倉裕登

あさくら・ゆうた
インターアクト部。AWSDCではサポートメンバー。

図1 AWSDC (Asia World Schools Debating Championships) 概要

会場 タイ・バンコク **期間** 2016年7月6～11日

参加国 南アフリカ、台湾、マレーシア、タイ、中国、日本、バングラデシュ、インドネシア、シンガポール、韓国、スリランカ、インドの12か国。1か国で複数のチームが出場。さいたま市立浦和高校からは2チームが出場。

試合方式 予選6試合を行い、上位8チームが決勝戦に進出。即興型ディベートで、試合開始1時間前に論題が発表される。論題は「This House believe that doctors should be allowed to strike. (医者がストライキをすることを認めるべきである)」のほか、政治、経済、環境など多岐にわたる。3人のジャッジがポート(投票)した数が多いチームの勝利。

戦績 Aチーム6戦2勝6ポート、Bチーム6戦1勝3ポート



写真1 さいたま市立浦和高校のチームは、日本の大会とは異なる雰囲気や圧迫されつつ、試合を重ねるうちに普段通りのディベートができるようになっていった。

試合を通して、英語力や思考力、精神力が大きく向上

大会には3人1組で2チームが出場。まず、予選が2日間行われ、各チーム6試合を戦った。松本紗季さんは、試合中、他国の出場者との英語力の差を何度も痛感したと言う。

「私のスピーチ後、ジャッジに『あなたの英語は分からない』と言われる、とてもショックでした。リスニングも、相手のスピーチの趣旨は分かっても、細かい部分聞き取れず、論旨のずれた反論になっていました」
予想を超える国際大会のレベルの高さに圧倒され、初めは戸惑った。

しかし、試合を重ねるうちに練習してきたことが発揮できるようになり、また、ジャッジの講評も参考にして修正を図っていった。そして、Aチームは3試合目で初勝利をもぎ取った。2日目は、1日目の反省を生かし、気持ちを強く持って試合に臨んだ。

「ジャッジに渋い顔をされたからといって諦めたら、そこで終わりです。挽回のチャンスがあるかもしれないと、何があっても冷静にスピーチを続けました」(長江佳乃さん)

Bチームは、先生と相談して、メンバーのポジションを変えた。
「今までやったことのないポジションでしたが、意外にもうまくいきました。行き詰まったら、それまでの方法にとらわれずに思い切って変えることも大切なのだ学びました」(玉村優奈さん)

徐々に耳が慣れ、対戦相手の英語も聞き取れるようになり、Bチームも勝利を収めた。

「5試合目は、自分たちの主張を何度も確認し、相手の論もしっかり聞き取れたので、的確に反論できました。6試合中最もスムーズに進んだ試合で、勝ててよかったです」

— AWSDC に出場して —

- 大会では、自分から積極的に話しかけて、外国の友人もできました。いろいろな国の人と交流して考え始めたのが、どうすれば多様な文化を背景に持つ人々が共生できるのだろうということです。それを大学で学びたいと思い、進路を考え直しています。(野内さん)
- 他国の出場者は、皆、自信を持ってスピーチをしていました。そうした態度も含めて、世界で主張していくためには、相手を納得させられる術を身につけなければならないと思います。アジアには英語が母国語の国は少なく、いろいろな英語を話す人がいる中で日本の主張を伝えていくために、対話力をもっと磨きたいと思います。(嶋村さん)
- 国際大会に挑戦して、自分の英語力がまだまだだと感じました。どうすれば日本人の英語力が高まるのか、大学で勉強し、教師になって、子どもたちの英語力を育てていきたいと思います。(松本さん)
- 大会後、友人との会話の中で、自然とうなずいたり、首をかしげたりしている自分に気づきました。相手の発言をうのみにするのではなく、深く考えよう、調べてみようという態度になり、自分が発言をする時も、筋が通っているか、自分がそう思う根拠は何かを考えるようになりました。(大澤さん)
- ディベートの活動を通じて感じたのは、社会が求めているのは、ただ英語を話せる人ではなく、深い思考力を持つ人なのということです。日本のメディアだけでなく、海外のラジオを聴くようになり、受験勉強ということだけでなく、教養を高めるためにも英語の学習を続けたいと思います。(玉村さん)
- 英語が話せるだけでは、コミュニケーションを取るのには難しいと気づきました。対話を続けるためには、相手の話に応じて、自分の考えを話すことが大事です。相手の文化や価値観についての知識も必要であり、会話力をもっと身につけたいと思いました。(長江さん)
- 入試対策として小論文を初めて書いた時、自分が思っていたよりもすらすらと書いてびっくりしました。ディベートで何度も立論をしていたおかげだと思えます。時事問題も勉強していますが、まだ自分の考えを深く語れるほどではありません。大学ではそこを突き詰めて学びたいと考えています。(浅倉さん)

(浅倉裕登さん)
予選で敗退はしたが、海外勢に勝ち星を挙げることができ、チームは大きな手応えを得た。
「他国の出場者も英語のネイティブスピーカーではありませんから、日本にも勝ち上がるチャンスはあるはずですよ。私たちの経験を次の出場者

に伝えることで、日本チームが世界レベルに近づいていってほしいと思います」(大澤賢さん)
英語ディベートの経験をを通して、生徒は様々な力を伸ばしていき、浜野先生は実感している。
「ディベートでは、物事を両面から捉え、各面を冷静に分析し、それに

基づいた考えを言葉で表現して、相手を納得させる力が求められます。ディベートを通して、相手の主張を理解し、それに対する自分の意見を伝えて、物事を論理的に解決していく、そうした人材を育てていきたいと思えます」(浜野先生)

全米最大の団体が主催する ディベート大会に挑戦

埼玉県立浦和高校の英語部が出場したのは、全米最大のスピーチ・ディベート競技団体NFL(The National Forensic League)が主催したディベート大会だ。部長の幅裕斗さんら2人が、15年6月に大分県で行われたNFL(*2)主催の日本大会で優勝し、16年6月開催の全米大会に出場する日本代表4チームのうちの1チームに選ばれた。

NFLの大会はPublic Forum(*3)というディベート方式で行われ、2人1組のチーム対抗となる。日本の主なディベート大会は日本の高校生が出場者が主体となるため、帰国子女の出場枠が制限されているが、この大会は主催がアメリカの団体であ

り、全米大会の出場者はアメリカ各地の地区代表が中心となるため、そういった制限がない。幅さんは小学6年生から4年間、アメリカに住んだ経験があり、英語力は申し分なさそうに思えるが、もう1人のメンバーとともにネイティブスピーカーではないため、アメリカ人との対戦は大きな挑戦だった。

また、論題は大会2か月前に提示されたが、それはアメリカ大統領選挙の予備選挙に関するものだった。日本の高校生には全くなじみのないテーマであったため、資料探しに苦戦したという。

「自分たちの立論だけでなく、相手の主張を予想して、反論できる準備もおこななければなりません。ジャッジが論拠を求める場面もあるので、そのための資料を準備する必要があるました。自分の主張を裏づける内容を英語の資料から探すのは大変で、部活動の時間だけでなく、家でも準備を進めました」(幅さん)
英語部顧問の小河園子先生は、幅さんの努力をこうたたえる。

「幅さんは小学校高学年で渡米したので、日本チームの中で英語力が特

* 2 NFLの日本版の大会を運営する組織。NFLJの大会で勝ち進めば、アジア大会やアメリカでのインターナショナル大会に出場することができる。 * 3 2人1組のチーム対抗で、時事問題を論題にディベートを行う。First Speakerの立論→質疑応答→Second Speakerの立論→質疑応答→要約→Grand Crossfire(4人での議論)→最終立論という順番で進める。



教諭
小河 園子
おがわ・そのこ
教職歴33年。同校に赴任して9年目。国際交流部主任。英語部顧問。英語科。

3年生
幅 裕斗
はば・ゆうと
英語部部长。

図2 NSDA (National Speech and Debate Association) 米国大会概要

会場 アメリカ・ユタ州ソルトレーク市 **期間** 2016年6月13～17日
論題 On balance, it is beneficial to have one day primary for Presidential Election. (アメリカ大統領選挙の予備選挙を1日にまとめて行うようにすべきであるか、否か)
試合方式 全米の地区代表と海外代表の計285チームによる予選を行い、上位64チームが決勝に進出。さらに、ベスト64に残らなかった米国チームの中で改めて登録したチームと、海外チームによる国際部門も実施。予選の上位16チームが決勝トーナメントに進出。
戦績 本選は6戦1勝4敗1引き分けて予選敗退。国際部門は4戦3勝1敗で予選通過。決勝トーナメントは1回戦で敗退。ベスト16。

段高いわけではないことを本人も自覚しており、日本チーム全体を指導していたアメリカ人や「EJ」の日本支部の代表者に自ら質問するなど、人一倍努力をしていました。そうした姿勢は、周りのメンバーの意識を変えていき、より綿密に準備をするこ

納得できないことがあっても
最後まで聞く姿勢がついた

全米大会には、全米の地区代表と海外代表の計285チームが出場(図2)。あまりの規模の大きさに圧倒されつつも、幅さんたちは冷静だった。

写真2 2人が本番で見せた思い切りのよさや、冷静に本質を突く試合運びは、小河先生も驚くほどだったという。

「英語母語話者がどのようにディベートを進めるのかに関心があったので、試合にも前向きに取り組みました」(幅さん)

幅さんが大きな手応えを感じたのは、「Grand Crossfire」という4人同時に参加して質問・応答、主張・反論を行う3分間でのことだ。幅さんが相手の主張に反論したところ、相手は再反論をしてこなかったのだ。

「相手が沈黙する姿に、自分の立論が正しく、きちんと伝わっているのだと分かりました。英語母語話者である相手をうならせることができて、大きな自信になりました」(幅さん)
 幅さんたちは相手の間違いを冷静

写真3 「大会を通してディベート力、英語力が上がった。臨機応変に対応する力をもっと高めたい」と幅さんは言う。

に指摘し、相手が感情的になっても、それに流されずに理詰めで進めていった。その結果、本選の予選は通過できなかったが、国際部門の予選は3勝し、決勝トーナメントに進出。目標を大きく上回る戦績を残した。

「相手の発言に納得できないことがあっても、相手の主張を正しく理解するために、最後まで話をしっかり聞くようになりました」(幅さん)

ディベートを通して身につけた力を生かし、社会を引っ張る人物になりたいと、幅さんは将来像を語る。

そうした生徒の成長を受けて、小河先生は、英作文の指導で、生徒の考えを揺さぶるような指摘を心がけるようになったと話す。

「自分の考えは絶対的なものではないこと、だからこそ、相手を納得させるには根拠や条件を示す必要があることを強調して生徒に伝えるようになりました。ディベートは、課題を分析し、解決策を論理的に探るといって、これからの社会に求められる力が鍛えられる教育活動であるという認識が、校内に広まりつつあります。生徒の活躍に触発されて、教師の意識も変わろうとしています」

関西大学が高校教員対象のアクティブ・ラーニングのセミナーを開催

アクティブ・ラーニングの効果的な手法を 理論と実践の両面で学ぶ

次期学習指導要領では、「アクティブ・ラーニング」(以下、AL)の視点からの授業改善が求められることになると思われる。高校現場でも関心を集めている。そこで、関西大学は、ALの実践に有用な知見を提供するため、2日間にわたるセミナー「高校教員のためのアクティブ・ラーニングを創る!」を開催した。近畿地方の高校教員58人が参加し、「学習研究」の観点からALに関する理論と実践を学んだ。その内容をレポートする。

「学習研究」の成果を 高校教育に還元

関西大学が高校教員を対象としたアクティブ・ラーニング(以下、AL)に関するセミナーを開催するのは、2015年度に続いて2回目だ。講師の森朋子教授が専門とする「学習研究」の観点から生徒の学びや理解のプロセスを解説し、ALの意義や有効な実践方法を共有することで、参加者とともにこれからの授業づくりを考えることを目的としている。

参加者が講義で学んだ理論をワークショップで実践しながら身につけ

られるよう、2週間の間を空けて2回(各1日間)に分けて開催された。

参加者の教科が偏らないよう、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語の教科別に定員枠を設けて募集したところ、大阪府や兵庫県を中心に近畿地方の高校教員58人が参加。若手教師だけでなく、管理職を中心に教職歴が30年を超えるベテラン教師も参加した。担当教科や経験、立場の異なる教師たちがワークショップで協働し、ALへの見識をそれぞれ深める場となった。また、前年度のセミナー参加者がティーチング・アシスタント(以下、TA)として加わり、参加者をサポートした。

図1 セミナーの概要、プログラム

日程 2016年11月26日、12月10日の2日間
講師 関西大学教育推進部 森朋子教授
参加者 高校教員58人(内訳 教科:国語10人、地理歴史・公民11人、数学11人、理科16人、英語10人/教職歴:1~5年目14人、6~10年目15人、11~15年目5人、16~20年目7人、21~25年目5人、26~30年目4人、31~34年目8人)

1日目	講義&実習	アクティブ・ラーニングとは何か アクティブ・ラーニングが抱える課題 よいアクティブ・ラーニングをつくるコツ ワーク①(講義の内容の振り返り)
	実習	ワーク②(個人ワーク) ワーク③(シェアワーク)
2日目	講義&実習	ワーク④(前回の振り返り) ワーク⑤(グループワーク) ワーク⑥(ジグソー法)
	講義	アクティブ・ラーニングの評価 まとめ



*同大学の資料を基に編集部で作成

のように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

生徒の学びが深まる授業の共通点とは

1日目は講義と実習が行われた。

講義では、学習研究や脳科学の観点から学びや理解のプロセスについての説明があった。学習内容は先行知識と結びつけて理解されるため、生徒個々で先行知識が異なることから、生徒全員が教師から教えられた知識を自分のものにはできないということや、知識は活用して初めて内化（*1）されるといった学習のメカニズムを解説し、自身の指導と生徒の学びにかい離がないかを見直す必要があることを伝えた。

続いて、今後生徒に求められる学力や次期学習指導要領の方向性、授業にALを取り入れるねらいを解説し、授業デザインの具体的なつくり方の説明に入った。森教授はまず、生徒の学びが深まる授業の共通点として次の3つを挙げた。

①ALにとられず、よい授業とは何かを考えている。

②生徒の理解度や能力に合わせて、内化↓外化（*2）↓内化が行わ

れている。

③個人を基盤としたグループワークを取り入れている。

これらの要素を総合したALの授業デザイン例が図2である。生徒は授業の前半で、前時の振り返りや講義を通して知識や考えを内化し、「分かったつもり」になる。続いて、グループワークによる外化を通して、理解を深めたり、分かっていることに気づいたり、新たな問いを持つたりする。そして、それらを統合させる内化の機会を再び設けることで、知識や思考は深まっていく。森教授は、そのようなALを「デイブ・アクティブ・ラーニング（以下、DAL）」と呼んでいる。

内化・外化を繰り返す授業づくりをグループで行う

実習では、教科別に16グループを編成し、知識定着型DALの授業づくりを行った。ALを取り入れた授業を行った経験のある教師とない教師が各グループに混在するようにし、経験者が特定のグループに集中しないように配慮した。

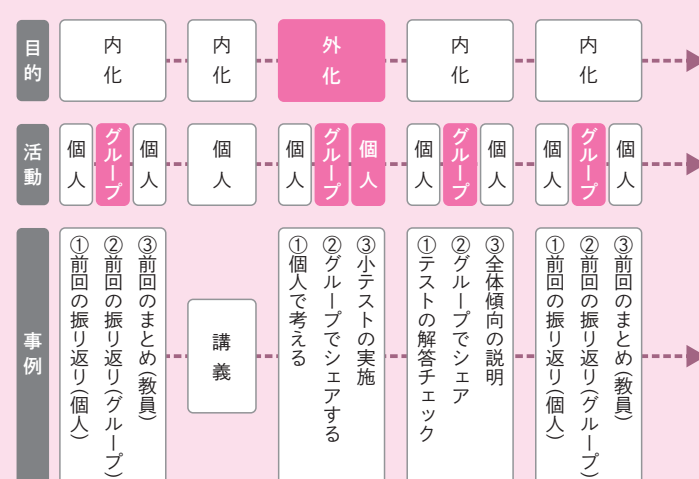
まず、各グループで仮想授業の単

元テーマと教育目標を設定。それを基に、個人で内化・外化・内化の3つのプロセスで構成される授業案を検討した。そして、グループ内で各自の案を説明した後、話し合っ

て1つの統合版を作成。最後に、ワールド・カフェ形式（*3）で各グループの案を共有した。他教科を含めた他グループの授業案から気づきを得た参加者も多く、その後、自身の授業案を修正する姿も見られた。

1日目の最後には、2日目の概要を説明して見通しを持つとともに、次回までの課題として、ALの研究書の指定された章（3章のうち1章で、参加者によって異なる）を読んでもおくように指示があった。また、2日目までの間、16年度に全学で導入した「関大LMS（ラーニング・マネジメント・システム）」（*4）を活用し、参加者同士が自由に感想や意見を交換し合った。

図2 アクティブ・ラーニングの授業デザイン例



*同セミナーでの配布資料を基に編集部で作成

ALの内容に関して知識構成型ジグソー法を実践

2週間後に行われた2日目は、最初に前回の内容を振り返った後、知識構成型ジグソー法（*5）を経験するグループワークが行われた。

まず、前回の課題で同じ章を指定された者同士3〜6人でグループとなり、キーワードを述べ合うなどし

*1 外にあるものを自分の認識下に取り入れること。 *2 習得した知識・技能を活用して問題解決を試みること。 *3 メンバーを変えながら少人数グループで話し合う形式のこと。カフェのようにリラックスした雰囲気の中で、世界を旅するかのように見聞を広めていくことから、その名がついた。 *4 ウェブ上の授業支援ツール。メッセージ機能や会議室機能などにより、受講生と教員間や、受講生同士のコミュニケーションのために活用できる。 *5 ジグソーパズルを解くア



写真 参加者は、休憩時には教科別に集まって、授業づくりについて話し合っていた。

て内容の理解を深めた。3つの章は、「協同学習」「知識構成型ジグソー法」「反転授業（*6）」について書かれたものだ。次に、各章1人ずつの3人グループをつくり、各自が読んだ章の内容をほかの2人に説明しながら、聞き手の2人は、説明を聞きながら、それぞれポイントを抜き出して「コンセプトマップ（*7）」を作成した。「今回のセミナーでは3人グループによる外化で終えたが、実際に授業で行う際には、この後、大人数での話し合いや全体に対する発表といったさらなる外化を経て、小テストや教師による説明などの最後の内化を行うことで、思考がより深まる」と、森教授は強調して伝えた。

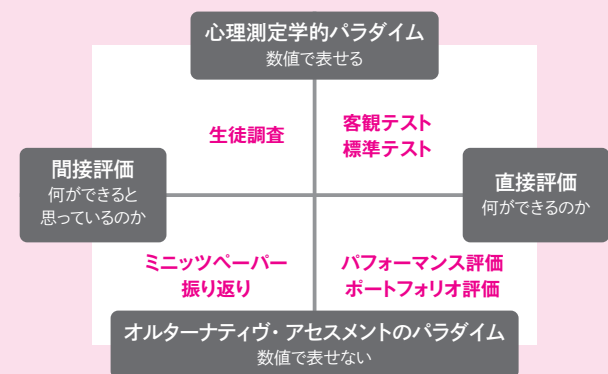
続いて、ALの評価に関する講義が行われた。評価には、成績をつけることだけではなく、生徒が復習して学んだことを整理する機会（知識の精緻化）、生徒が自分の理解度を確認する機会（メタ認知）、生徒がさらに学ぶ動機を獲得する機会（動機づけ）、そして教師が自身の指導を見直す機会といった教育機能があることが説明さ

ルーブリックを用いたALの評価方法を提案

「間接評価」の軸と、「心理測定的パラダイム（数値で表せる）」と、「オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（数値で表せない）」の軸があり、これによって評価手法が4象限に分かれることを示し、それぞれ具体的な評価方法を挙げた（図3）。このうち、ALの評価では、直接評価とオルタナティブ・アセスメントの観点を踏まえたルーブリックの作成が提案された。

また、授業構成では、総合的評価（*8）と形成的評価（*9）それぞれを行う場面を取り入れることが重要だと説明された。最後に、森教授は、「以前は与えられた問題を効率よく解く力が求められていたが、今は課題を自分で設定し、それを解決して前進していく力が求められる社会になっている。そのため、学校でも自ら思考して知識を次々に更新していく練習を生徒に積ませなければならぬ。DALはそのための鍵になるはずだ」と述べた。

図3 学習評価の構図



* 2016年6月27日 関西大学アクティブ・ラーニングセミナー「21世紀を生き抜く『新しい能力』を育む教育とその評価」松下佳代氏講演資料を改変

参加者の声

体験を通してALの本質を理解したという声が多数

事後アンケートでは、多くの参加者が授業づくりを考える上で学びや気づきがあったと述べている。

アンケートに回答した57人中、54人は「セミナーをきっかけにALに対する理解が深まった」、49人は「今後授業で実践することができそう」と答えた。自由記述回答では、「ALはグループで何かをするだけの活動と思っていましたが、最終的に個人の内化に落とし込むことが大切だと聞いて、目から鱗が落ちました」「ALに懐疑的でしたが、理論を聞いて腑に落ちました」「何となく実践していましたが、注意すべきポイントが分かりました」など、ALの本質の理解につながったという声が多く寄せられた。また、「セミナーでALを体験して、どのようなものか分かった」と、ワークを通して自らALを体験する中で理解を深めたという参加者も多かった。

さらに、教師同士の横のつながりが学びのきっかけとなったという声も聞かれた。「他校の先生方と知り合い、情報交換ができたことがよかった。今後も継続できるコミュニティーを望んでいます」「『関大LMS』はよい勉強の場になり、ヒントをたくさんいただいた」など、他校の教師との交流は貴重な機会となったようだ。一方、今回のセミナーはあくまでも入門的な位置づけであり、「教科別のALの実践法をたくさん聞きたい」など、発展的な内容を望む声も寄せられた。

* 6 新たな学習内容をビデオなどを使って予習し、授業ではほかの生徒と協働して問題を解いたり、教師が個々に合った指導をしたりする授業の形態。 * 7 物事の関係性を線などで結んで関係性を視覚化する技法。 * 8 テストなどを行い、学習者の到達度を確認する評価のこと。 * 9 学習の途中で、理解の状況などを把握し、計画の修正が必要かどうかを知るために行われる評価のこと。

「どう教えるか」だけでなく、「どう学んでいるか」という視点も大切

指導と学びのずれの解消が 授業改善の第一歩

私の専門である「学習研究」では、教育現場の「実践知」を集め、そこから子どもがどう学び、どのように理解するのかというプロセスを解明して理論化します。その観点で言うと、先生方がよい授業をしようと努力されているのは承知していますが、「教師がどう教えるか」と「生徒がどう学んでいるか」との間にずれがあり、そのために指導の成果が十分に得られていないのが実情です。

例えば、グループワークをしても、生徒が教師の指示に従って動くだけで、思考が活性化していないケース



関西大学教育推進部教授
森 朋子 もり・ともこ
専門は、学習研究、学習理論、教育方法学、慶應義塾大学外国語教育センター上席研究員等を経て、現職。

が見られます。そうなる要因には、教師が「どう教えるか」を重視し、生徒が「どう学んでいるか」に考えが及んでいないことが挙げられます。

今回のセミナーは、そのような研究成果を説明するとともに、「子どもの学びをどうサポートするか」という観点で授業づくりを考え、実践する重要性を学べる内容としました。セミナーの名称は「アクティブラーニングを創る」ですが、ALありきの授業づくりではありません。生徒の学びを活性化させるための授業のあり方を考えたなら、結果としてALになったという流れです。

ALを実践する上で教師に必要な心構えは、「リサーチ&ディベロップメント」に尽きるでしょう。批判的思考力を持って研究し、実践を通して、教師自身や目の前の生徒に合った指導方法を開発していくことが、効果的なALを行うためには欠かせ

ません。ですから、セミナーでは現場の実践から生まれた理論を伝えることにこだわりました。その理論を土台として、各教師が主体的に自分なりのALを実践していただければと思います。

同じ志を持つ先生方の 横のつながりをつくりたい

ALの推進には様々な壁があるとあります。例えば、「ALは『総合的な学習の時間』や探究活動で行うものだ」という意見が聞かれます。「学習研究」の観点では、ALによる深い学習はいわゆるコンピテンシー（*10）の育成につながるだけではなく、学習内容を定着させる上で非常に有用であることが明らかになっており、それはデータを交えてセミナーでも説明しました。

ほかに、「講義でも生徒の思考を活性化させる発問ができるので、ALは必要ない」といった意見があります。確かに教師の発問は重要ですが、それは出発点に過ぎません。発問によって、生徒の中にどのような思考や疑問が生まれたのかを、グループワークなどの外化のプロセスを経

て把握し、それを受け止めて授業を発展させることが、生徒の深い学びにつながります。生徒の学びのプロセスを考えると、教師の最初の発問以上に生徒自身が生み出した問いが重要であると言えます。

また、高校では、授業改善を学校全体で組織的に進めることにも課題があると思います。それは、授業改善を進める教師が孤立しやすい、教師の授業スタイルの違いにより生徒が学び方を変えざるを得ないといった問題です。そのため、本学が中心となり、同じ志を持つ教師同士の横のつながりをつくりたいという思いがありました。「関大LMS」はその一環で、2回のセミナーの間や終了後に参加者やTA、講師である私がつながり、考えを述べ合ったり、実践を紹介し合ったりする場として活用しています。今後、生徒の思考を活性化させる発問の例を教科ごとに集めるシステムに発展させたいと考えています。

さらに、他大学との連携も模索し、より組織的な動きに発展させて、高校の先生方の授業づくりを支援していければと考えています。

*10 知識や技能、態度など、特定の課題・要求に対応することができる力のこと。

変化を恐れず、考えることが重要

12月号の表紙メッセージ「変化を恐れない」の通り、これからの社会を見据え、求められる進路指導と教師が果たすべき役割を考えることが重要だ。一方、特集で紹介された職業に関する衝撃的な予測を鵜呑みにしてよいのかという危惧も抱いている。企業と異なり、「不易と流行」の「不易」の部分を最も大切にすべき教育現場の人間が、「流行」の部分に踊らされてはいけないと警鐘を鳴らしている。また、北海道旭川東高校の松井恵一先生の「生徒には大いなる不完全燃焼をさせたい」という発想が面白いと思った。変化の激しい時代だからこそ、教師だけで生徒を育てようという姿勢が必要なのかもしれない。

「滋賀県立草津東高校・堀浩司」

社会に貢献する人材の育成は教育の醍醐味

12月号の「指導変革の軌跡」の北海道釧路東高校のように、生徒指導の難しい時期から、学習指導による学校の活性化への流れをつくることは大変なことであり、同校に敬意を表する。基礎学力の向上から、生徒に自信や誇りを持たせ、自尊感情や自己有用感、人と協働することの楽しさなどを実感させ、他者や社会に貢献する人材を育むことは、教育の醍醐味の1つだと思つ。 「徳島県・匿名希望」

行事を通して伝えられる伝統と育まれる力

学校祭や体育祭を見れば、その学校がどのような校風であり、どのような生徒を育てようとしているのかが端的に分かる。12月号の「ハ

Reader's VIEW

Volume 6

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

「トをこがせ!」の記事を読み、行事を通して上級生から下級生に伝統が伝えられ、リーダーシップやフォロワーシップが育つていくことを、改めて実感した。「福井県・匿名希望」

「ぼそぼそ話す」が鍵

アクティブ・ラーニングのポイントの1つに、話し合いの時間をいかに設定するかがあ。話し合せてさえいけば思考が深まるわけではないし、話し合いが思考を邪魔することもある。その意味で、12月号の「実践 アクティブ・ラーニング」にある「ぼそぼそ話してみて」は大変面白く、ぜひ参考にしようと思つた。 「福井県・匿名希望」

それぞれの特徴を生かした教育

12月号の「大学Evolution」は地方、「次代の教育を形づくる教委の一手」は東京の視点で書かれていて興味深かった。両者ともに英語をキーワードに挙げていたが、英語や外国人に触れる機会の多さは、東京が絶対的に有利だ。それを基にどう涵養していくのかという視点で「大学Evolution」を読み返した。それぞれの特徴を生かした教育を行うアイデアが随所に見られ、とても興味深い記事だった。 「静岡県・私立沼津中央高校・後藤松太郎」

教師川柳

磨き合う子らの背中に春の風

福島県・臥煙

改良したいのに、どうすべきか分からない

指導ツールを募集しています!

◎「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のコーナー(P.34~37)では、取材にご協力いただける先生、及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールをより効果的に使用する指導法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

必要事項①~④をご記入の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください

①学校名・お名前 ②分掌・ご教職歴 ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法) ④ツールに対する課題意識、改善要望

▶▶▶ view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

編集後記

◎今号の「ハートをこがせ!」で取材させていただいた山梨県立ひばりが丘高校の生徒たちは、会ってすぐに元気に挨拶をしてくれ、インタビュー時もハキハキと受け答えをしてくれました。そのため、「入部前は人見知りで、言いたいことを伝えられなかった」という言葉を聞いた時は、驚きました。また、地域の方にもお話を聞く機会があり、「うどん部のおかげで地域が元気になった」と、地域活性化の一助となっていることも分かりました。今や富士吉田にとどまらず、全国各地で活動しているうどん部……今後も目が離せません! (廣田)

VIEW21 2月号 Vol.6

2017年2月13日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 (株)協同プレス
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太
撮影協力 荒川 潤、川上一生、ヤマグチイッキ

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2017

VIEW21

2017
April
4月
Volume 1

次号は
4月10日発行(予定)
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」の指導ツールの応募時にご提供いただく個人情報は、今後の企画の検討や製作の目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。 (株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご記入ください。

COVER STORY

教師と生徒の肖像

「なるほど」を楽しもう

表紙の学校 愛知県・私立東邦高校 山田剛司先生

1年生の数学を担当する山田剛司先生が「今日の授業は『学び合い』にします」と言うと、教室にはわかに活気づく。先生が10分間で要点を説明した後、生徒は問題に取りかかり、解き終えた生徒は教卓にある解答のプリントを見て自分で答え合わせをする。正解したら、マグネット式の名札を黒板の「できた人」の枠に貼り、苦戦している生徒に教えに行く。目指すはクラス全員が分かるようになること。生徒たちの教え合う声が聞こえる中、先生は教えた気持ちをごとこらえ、ファシリテーターに徹する。沈黙しているグループの生徒たちには「分かっている人のところにそれぞれ出張したら」と助言し、手持ち無沙汰にしている生徒には「まだ名札を貼っていない人がいるよ」と教え役を促す。「過去の経験を基に問題を乗り越える術を学ぶのが学校だと思います。教師が話すぎず、自分自身で、そして生徒同士で協力して解決できるように心がけています」とその意図を語る。

先生が授業で学び合いの活動を始めたのは、今年度からだ。校外研修で初めてその手法を知った時、自校の生徒にできるのか半信半疑だった。しかし、「仕組みが分かった時に『なるほど』と感ずる数学の面白さを知ってほしいと、思い切って取り入れました。その初めての授業で、私が何も言わなくても、生徒たちが自ら動いて教え合う姿には感動しました」と大きな手応えを得た。「数学は得意ではないけれど、友人と一緒に考えるのは楽しい」「教える方になりたいから、予習にも力を入れるようになりました」と、生徒が意欲的に取り組む様子は、先生の意識も動かした。「生徒には私たちが想像する以上の力があるのだと改めて実感しました。生徒が、数学を楽しみながらしっかりと理解し、もっと勉強したいと思えるよう、これからもいろいろなことにチャレンジしたいと思います」。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume6 2017年2月号

2017年2月13日発行 / 通巻第362号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2017

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17